

豊後大野市内遺跡 発掘調査概要報告書 7

— 平成27年度調査 —

2017

豊後大野市教育委員会

豊後大野市内遺跡 発掘調査概要報告書 7

— 平成27年度調査 —

2017

豊後大野市教育委員会

例 言

- 1、本書は平成27年度に豊後大野市教育委員会が国庫及び県費の補助を受けて実施した市内遺跡事業の確認調査概要報告書である。
- 2、調査の体制は以下のとおりである。

調査指導 禰亙田佳男(文化庁主任文化財調査官)
田中裕介(別府大学教授)
越智淳平(大分県教育庁文化課)

調査主体 久保田正治(豊後大野市教育委員会教育長)

調査担当 芦刈次郎(社会教育課長)
高野弘之(社会教育課文化財係長) 諸岡郁 豊田徹士 大野幸則(同 文化財係)

このほか、清水宗昭氏(別府大学非常勤講師)、杉井健氏(熊本大学准教授)、綿貫俊一氏(大分県埋蔵文化財センター)のご視察ご指導をいただき、佐藤裕一郎氏(豊後大野市文化財保護審議会委員)には石材について、神田高士氏(臼杵市教育委員会)には石棺についてご教示いただいた。
- 3、漆生古墳群の調査における遺構実測およびトレース、坊ノ原古墳の墳丘測量図作成については別府大学考古学研究室生の協力をいただいた。また、発掘調査は別府大学の「埋蔵文化財実習Ⅱ(遺跡発掘)」の授業として行った。写真撮影は調査員で行った。
- 4、坊ノ原古墳の遺物実測およびトレースは雅企画有限会社に委託したほか、田中裕介氏・別府大学考古学研究室生の協力を得た。
- 5、若宮古墳の墳丘測量図作成については(株)システムサポートに委託した。
- 6、本書の執筆はⅡ漆生古墳群の発掘調査について田中裕介氏・大矢健太郎氏、中原彰久氏、村田仁志氏(別府大学考古学研究室)、井大樹氏(大分県教育庁埋蔵文化財センター)より玉稿をいただいた。その他の執筆は調査担当が行い、編集は諸岡が行った。

目 次

I はじめに	1	3 まとめ	30
II 漆生古墳群	3	IV 百枝遺跡(E地区)	33
1 調査の経過	3	1 調査の経過	33
2 漆生古墳群第5次調査	5	2 調査の概要	34
3 大久保2号墳の石棺蓋	15	3 まとめ	37
4 漆生古墳群の立地について	16	V 若宮古墳	40
III 坊ノ原古墳	19	VI 千仏東遺跡	43
1 調査の経過	19	VII 三重原遺跡	44
2 確認調査の概要	20		

I はじめに

1 調査に至る経過

大分県豊後大野市は、平成 17 年3月に大野郡7町村が合併して成立した。その市域は広大で、大分県南部の大野川中流域のほぼ大部分に相当する。その結果、豊後大野市内には先史から近代に至る様々な歴史・文化遺産を有することとなり、それは約 500 件の指定文化財や約 700 箇所所周知遺跡数に表わされている。これらの保護について合併前の各町村時代から引継いで取り組まれているが、特に市域の広域化と同時に各種開発工事も増加し、比例して埋蔵文化財調査の対応件数も増加傾向にある。

豊後大野市教育委員会は国庫・県費の補助を得て、各種開発工事に対する遺跡の保存に向けた協議資料作成の調査と並行して、主要古墳などの範囲確認のための発掘調査を実施している。平成 27 年度は遺跡範囲確認として漆生古墳群と坊ノ原古墳の2箇所で発掘調査、若宮古墳で墳丘測量調査を実施し、緊急開発工事に伴う調査は千仏東遺跡、三重原遺跡、百枝遺跡の3箇所で実施した。

漆生古墳群は、平成 23 年度より別府大学の協力を得て、古墳群4基の墳丘測量図の作成、及び遺構確認調査を行ってきたが、平成 27 年度も継続して第5次調査として大久保1号墳後円部と2号墳・3号墳の墳頂部、城山古墳の墳頂部など未確認箇所の調査を実施した。

坊ノ原古墳は平成 26 年度の測量に続いて確認調査を行い、周溝などの遺構や遺物を確認することができた。若宮古墳では墳丘測量並びに石棺実測を行った。

開発工事に伴う調査として実施した百枝遺跡では旧石器時代の遺構や遺物を検出したが、調査区がほぼ開発区全域となったためそのまま記録保存として調査を終了した。千仏東遺跡と三重原遺跡では特に遺構・遺物は出土せず工事実施となった。

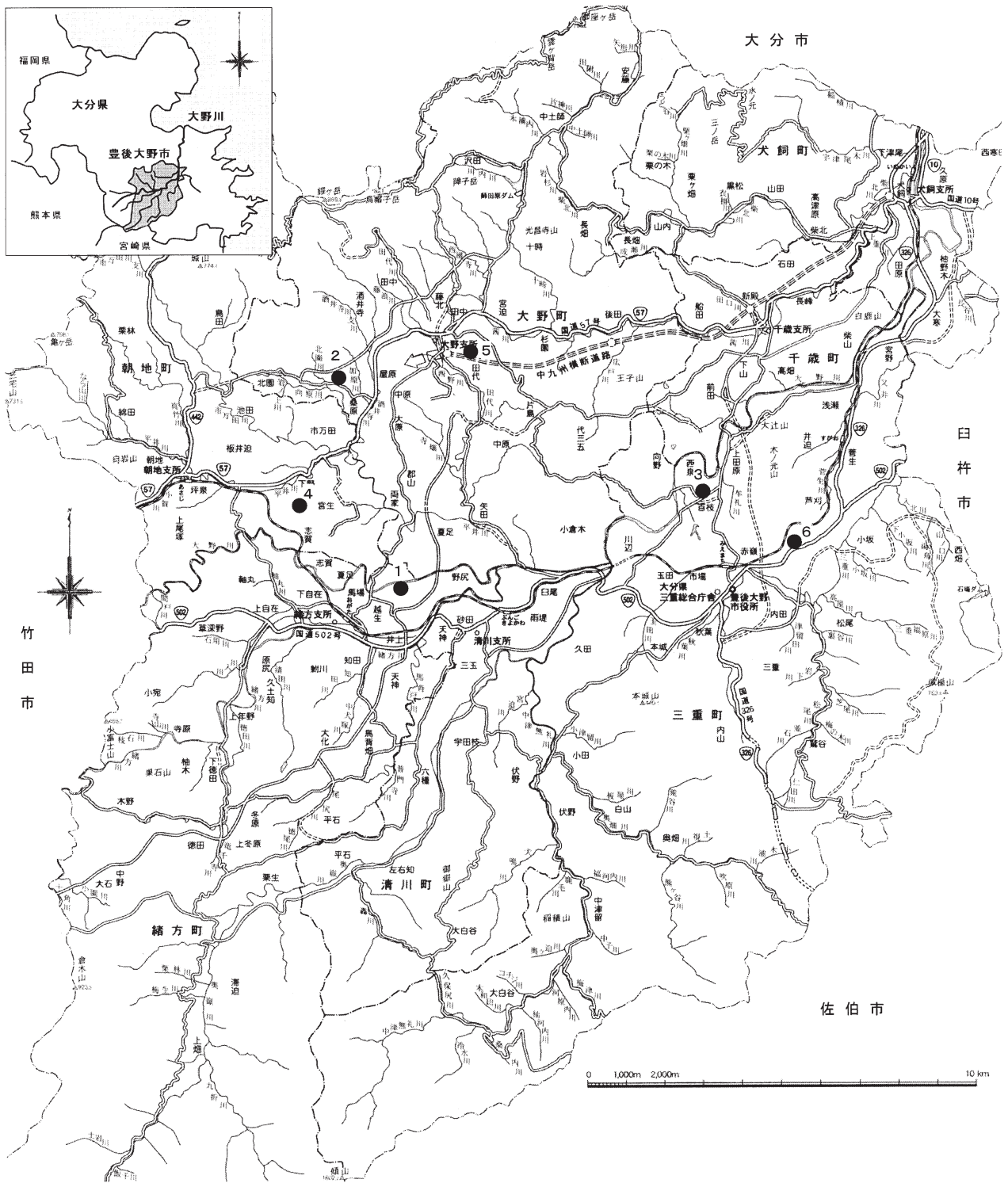
2 歴史的環境

大野川中流域には阿蘇溶結凝灰岩による台地や、大野川本流及び支流による沖積平野などの地形が随所に見られ、これらの地形上に数多くの遺跡が所在している。

旧石器時代の遺跡は国指定史跡の岩戸遺跡をはじめ、市ノ久保遺跡・津留遺跡・百枝遺跡・駒方遺跡群など著名な遺跡が多く知られている。縄文時代も同様で、早期の田村遺跡・鳥穴遺跡、前期の千人塚遺跡、後期の夏足原遺跡・惣田遺跡、晩期の大石遺跡・宮地前遺跡などで良好な遺構や遺物などが確認されている。

弥生時代では特に後期に大規模集落として多くの遺跡が各台地上で見られる。200 基を超える竪穴住居跡や掘立柱建物群が検出された鹿道原遺跡をはじめ、高松遺跡・高添遺跡・二本木遺跡・陣箱遺跡など多数知られている。県下でも代表的な遺跡集中地域であるが、古墳時代以後になると集落遺跡は減少し、生活の痕跡は台地上から谷底平野への変化が見られる。しかし墳墓の遺跡は多く、市内には8基の前方後円墳をはじめ、各河川流域の単位で古墳群が築造されている。特に前方後円墳6基が集中する三重川流域周辺を中心に、平井川流域周辺に円墳群、緒方川流域等に横穴墓群など数多くの古墳・横穴墓の分布が知られている。

歴史時代以後について、市域は豊後国大野郡の大部分に含まれる。条里跡と推定される地割が緒方平野で確認され、磨崖仏や石塔類などの石造物が多く所在する。遺跡調査例としては古代の遺跡は古市遺跡等で行われているのみであったが、近年加原遺跡で古代の建物群跡などが確認され、郡衙関連の施設跡と推定される。中世になると建物遺構が惣田遺跡や高添遺跡で、墳墓群が千人塚遺跡で検出されている。また、松尾城や高尾城など山城をはじめ、上門出遺跡や一万田氏館跡など多くの中世城館跡が確認されている。近世は臼杵藩と岡藩の領域に属し、両藩の様々な関連施設や、街道や河川港などの交通の遺跡等が所在し、一部は現在でも人々の生活や社会と結びついている。



第1図 平成27年度 市内遺跡調査位置図

No.	遺跡名	調査地	調査期間	調査内容
1	漆生古墳群	緒方町越生字大久保・城山	2015.12.19～2015.12.28	範囲確認調査
2	坊ノ原古墳	大野町桑原字羽部	2015.10.21～2015.12.17	範囲確認調査
3	百枝遺跡	三重町西泉字折立	2015.8.27～2015.9.18	確認調査
4	若宮古墳	朝地町宮生字若宮	2015.6.30～2015.7.30	墳丘測量調査
5	千仏東遺跡	大野町田代字尾無	2015.5.26～2015.5.28	確認調査
6	三重原遺跡	三重町赤嶺字大原	2015.7.9～2015.7.10	確認調査

II 漆生古墳群

1 調査の経過

緒方町越生区の大野川沿岸を見下ろす丘陵上に所在し、前方後円墳1基を含む4基の古墳群が尾根地形上に並ぶように分布している。石棺が露出する一部の古墳は古くから存在は知られていたが(1)、平成4年に前方後円墳の発見により現地踏査が行われ、古墳群として確認された。名称としては、字大久保に3基所在することから、新発見の前方後円墳を大久保1号墳、石棺が露出している旧「大久保古墳」を大久保2号墳、1号墳の南に古墳と推定される地形上の高まりを大久保3号墳とし、字城山の城山古墳を含めて漆生古墳群と呼称されている。大久保1号墳の墳丘測量や大久保2号墳の石棺実測が行われたものの、築造時期の推定できる出土遺物等は全く知られてなく、大久保2号墳及び城山古墳は石棺の観察から中期古墳、大久保1号墳は墳形による推定で前期古墳とみられていた(2)。

遺跡範囲の確認調査として平成23年度より測量調査を開始し、平成24年度より26年度までに4次に渡って各古墳の墳端等にトレンチによる試掘調査を実施している(3)(4)(5)。大久保1号墳からは葺石や段築面などを検出し、大久保2号墳や城山古墳からは主体部の墓坑の痕跡を確認するなどの成果があったが、出土遺物が乏しく時期は不明のままである。平成27年度に第5次調査として、大久保1号墳の後円部墳頂の遺物の確認、大久保2号・3号墳・城山古墳の墳頂部の主体部の確認調査を行った。なお、大久保1号・3号墳の調査は次年度に継続して、平成28年度に第6次調査として行っている。

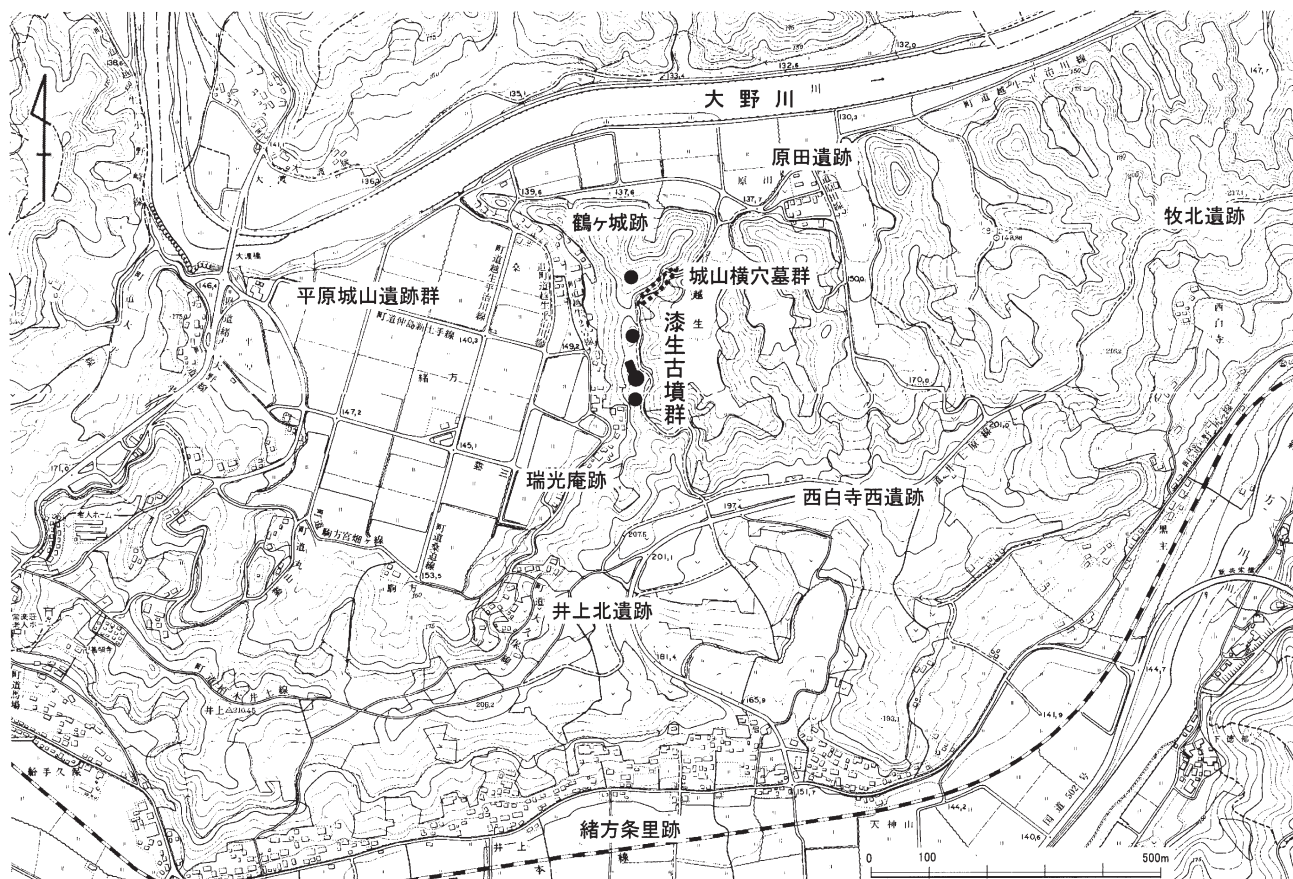
註 (1) 日名子太郎「大野郡古墳横穴調査書」『大分県史蹟名勝天然記念物調査報告』第7輯 1929年

(2) 田中裕介ほか「緒方町越生にある漆生古墳群の観察」『おおいの考古』第6集 大分県考古学会 1993年

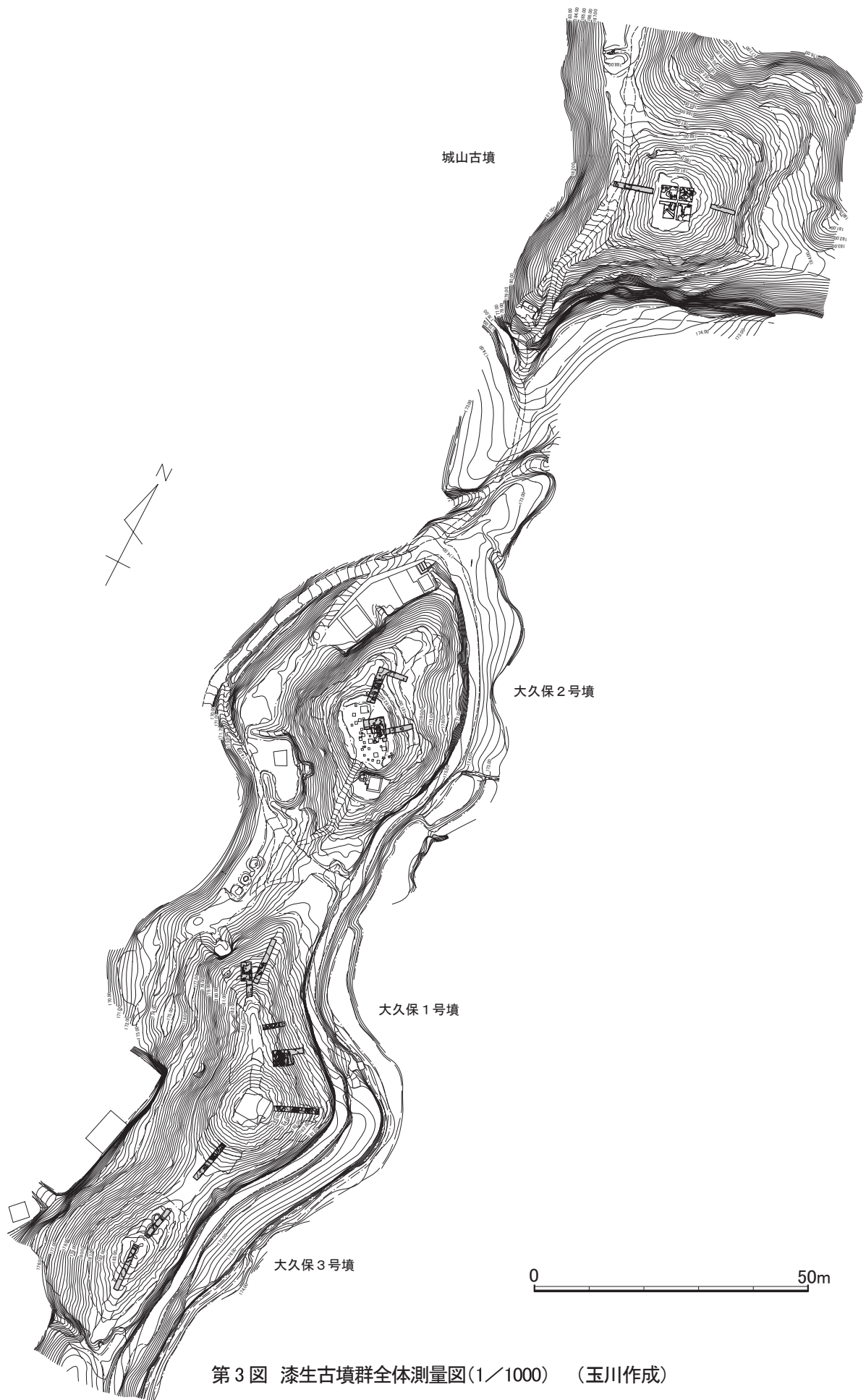
(3) 『豊後大野市内遺跡発掘調査概要報告書4』豊後大野市教育委員会 2014年

(4) 『豊後大野市内遺跡発掘調査概要報告書5』豊後大野市教育委員会 2015年

(5) 『豊後大野市内遺跡発掘調査概要報告書6』豊後大野市教育委員会 2016年



第2図 漆生古墳群周辺地形図



第3図 漆生古墳群全体測量図(1/1000) (玉川作成)

2 漆生古墳群第5次調査

大矢健太郎・中原彰久・村田仁志・田中裕介

はじめに

既往の調査から 漆生古墳群の発掘調査は、2012(平成24)年度と2013(平成25)年度の冬に続いて、2014(平成26)年度には8月と12月に、さらに2015(平成27)年度冬の5次にわたって、それぞれ豊後大野市教育委員会と別府大学考古学研究室の合同調査団によって行った。その結果大久保1号墳は前方後円墳であることが実証された。後円部には尾根線を断ち切る溝と葺石さらに1段目の平坦面も確認された。前方部前端の位置も判明し、墳頂は36mとほぼ確定した。大久保2号墳は葺石や周溝や突出部は確認できなかったため、前方後円墳の可能性はなくなり、墳丘測量図より、方墳である可能性が指摘された。大久保3号墳では箱形石棺の蓋石が発見され、周囲にはベンガラ塗布が行われていた。一度蓋石をあけた追葬の痕跡も見つかり、墳端の削平面をみとめて径10mほどの円墳であると推定された。また測量調査によって方墳である可能性が指摘された城山古墳は、その後の調査によって中世末の山城による改変の可能性が高まり、大久保3号墳と同じく小円墳の可能性が高くなった。

以上のように古墳群は4基からなり、葺石のある古墳、ない古墳の違いがあることもわかってきた。しかしトレンチからは出土遺物がほとんどなく、土師器の破片がわずかに出土しているのみである。したがって各古墳の築城順序や時期など依然として明確ではなかった。

今回の2015(平成27)年度の調査では、これらの点を踏まえ、1号墳では後円部頂の土器の有無、2号墳では石棺の直下を調査した(図3)。

第5次発掘調査

現地調査は諸岡、田中を主担当者に、上野、玉川が副担当であたり、2015(平成27)年、12月19日(土)～21日(月)、26日(土)～28日(月)には別府大学の遺跡調査実習(集中講義)および考古学研究室の学生が参加した。参加者は以下の通り。

学生 井大樹、安部和城、江口寛基、中嶋小春(以上院1年)、村田仁志(学部4年)、高木慎太郎、塩見恭平、藤丸紗弥加、片岡翼、川野啓太、窪田優也、松堂正偉、東啓二、片山唯、有村源喜、安藤佳奈子、大原雅哉、倉員秋穂、黒原啓太、佐藤博紀、竹永昂平、野上慧、柳瀬茉希、山脇拓昌(以上学部3年)、井手基子、後藤愛美、時枝杏名、野田千輝、吉岡拓哉、古田矩美子(以上学部2年)、川村有紀、清水昂平、佐伯孝央、前田純子(以上学部1年)

また赤色顔料の同定を平尾良光(別府大学文学部教授)先生に行っていただいた。また図面整理とデジタルトレースには大矢・中原・村田(院1)が当たり、玉川剛司(別府大学文化財研究所)の協力を得た。なお本稿は以上院生3名と田中が協議して成稿したものである。

基本層序 古墳群の造られた丘陵は阿蘇4溶結凝灰岩の堆積浸食により形成された丘陵である。基盤層はこの凝灰岩層がかなり風化して軟化した土質である。現表土の腐植土層を第1層、その下の自然堆積層を第2層、盛土等の人為堆積層を第3層、基盤の凝灰岩層を第4層として、その層序の間に形成される人為的な面をアルファベットで記載した。(田中)

大久保1号墳 (写真図版1)

これまでの調査によって大久保1号墳の墳形が前方後円形であること、葺石の存在、後円部2段前方部1段の構造、後円部尾根側には周溝の存在が判明し、墳長36mの規模も確定した。

ところがいずれの調査区でも出土遺物は僅少で、壺形埴輪など墓上に配列する遺物は出土せず、わずかな土師器の小片が出土するのみで、大久保1号墳の構築時期を推定する材料が不足していた。

そこで古墳埋葬儀礼に伴う土器の出土がみこまれる地点として、すでに東側くびれ部を調査しており、西側くびれ部は崖状になり危険をとまなうので、後円部墳頂平坦面の調査を考えた。その際平坦面は、後世の乱掘の痕跡はなく保存状態や良好と考えられ、葺石とは異なる小円礫の広がり確認できるので、その上面を露出して、埋葬儀礼の痕跡と土師器の採集を目的とする調査区を設定した。

後円部墳頂調査区

前方部の中軸線を基準に4.5m×4.5mの方形の区画を設定し、表土剥ぎから行った。するとすぐに2・3cm大の小円礫が露出し始めた。さらに表土剥ぎを進めると円礫の広がり存在することが判明し、その上面から3～4cm大の土器片が見つかり始めた。また円礫の広がりも凸凹があることが分かったがのちにこれは木の根による乱れであると判明した。調査5日目までに、墳頂平坦面全体に設定した調査区の全面から円礫の広がりを確認した。墳頂部は全面にわたって小円礫が敷かれている。円礫は大久保1号墳が作られた丘陵の土壌には含まれていない。おそらく近隣の大野川あるいは緒方川から採集されたものと考えられる。

調査目標の一つであった土器片については、墓上儀礼の内容を示すような出土状況を示す痕跡はなく、数点の土師器片が点在するのみの状況であった。

今回の調査はここまでとして、次回の調査で写真撮影と実測を行うことにし、仮設の埋め戻しを行った。

調査成果

今までの発掘調査成果に追加修正を加える形で、成果報告を行う。①昨年度調査によって、すでに後円部墳端が確定している。これに加え、今回の調査で、第4トレンチの前方部前端より検出されたトレンチと直行して列をなす葺石を、第3トレンチにて検出されていた円礫散布の延長ということも合わせて、前方部前端とするならば、古墳の全長は約36mとなる。②前年度調査において、後円部にて検出された周溝が、前方部側では確認できなかった。③前年度調査ではほとんど遺物が出土せず、時期を特定できる遺物の出土が期待されていたが、今回も古墳築造に伴う資料は得られなかった。(田中)

大久保2号墳 (第4図)

これまでの調査によって大久保2号墳は、墳形に関して、円墳だと考えられてきたが第2次調査の際に実施した墳丘測量によって方墳である可能性が指摘されている。だが、墳形や墳長は判明していない。その一方で葺石がないことが第3次調査によって判明している。墳頂部は、近世の墓地造成にもなう削平により、最大長13.8m、幅8.9mの平坦面が形成されている。この墓地内西側には、側辺部長約2m×小口部長約70cmの凝灰岩製の一石刳抜式舟形石棺の蓋部が露出している。

第4次調査において石棺蓋が露出した墳頂部に棺身の発見と墓坑の確認のためにトレンチをいれ調査を行った結果、石棺の西側拡張部において整地層から赤色顔料のついた親指大の凝灰岩片が数点出土したので掘り下げを行うと、赤色顔料を多く含む墓坑埋土のC層が検出された。だが遺物は確認されなかった。その下からは、凝灰岩の基盤を刳抜いて整形された墓坑の残存部が確認された。この墓坑の表面には、赤色顔料が塗布され、小口部の平面形は方形ではなくやや円形の形をしていた。赤色顔料であるが、科学分析を行いベンガラであることが確認された(平尾良光氏による分析)。結果的には、石棺の身の破片も発見されず、身は刳抜式石棺ではなく基盤層を刳り抜いて用いられたのではないかと考えられた。また、石棺の北西側の調査区を掘り下げたが予想より厚い

凝灰岩礫を多く含む整地層 2 層が堆積して遺構を検出することはできなかった。だが、整地層には人頭大の凝灰岩礫が多く含まれ、基盤層の上から中世糸切底の土師器小片が出土しており、整地層とそれに伴う削平は古墳時代ではなく中世に下ると考えられ、大久保 2 号墳の中世の利用の可能性も考えられる。



第 4 図 大久保 2 号墳のトレンチ配置図(1/500) (玉川作成)

墳頂部調査区 (第 5 図)

前年度調査の継続として墓坑全体を把握するために剝抜石棺の直下の

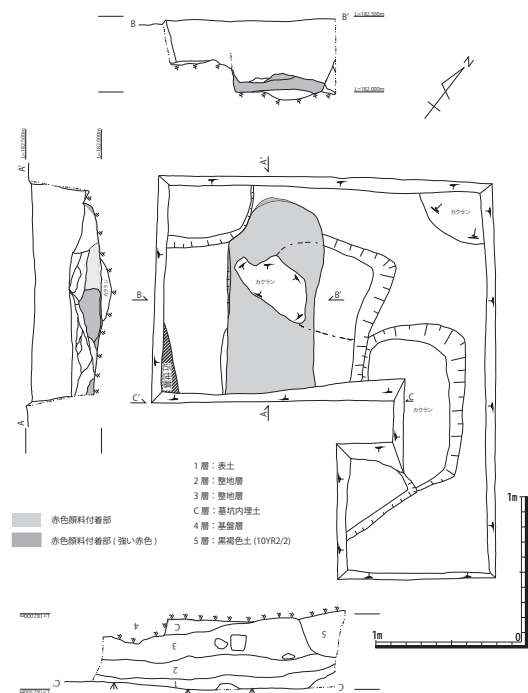
調査を行った。石棺の蓋部を移動させ掘り下げを行うと赤色の付着がみられる凝灰岩片が複数見つかった。また、墓坑を削り出す際の加工痕がみられる壁があり、その横には赤色をともしないが残りの良い壁がみられ、赤色顔料が付着した部分が崩れ落ちたのではないかと考えられる。この墓坑の下部の側壁は 14 cm 程であった。表土より約 40cm~46cm ほど掘り下げていくとおおよその墓坑の輪郭を確認することができた。この墓坑であるが長さ約 130cm 以上×幅が約 60cm になると推定される。小口部分は、平面形では丸形をしており石棺の蓋に合わせるためにこのような形をしているのではないかと考えられる。

小口部の深さは 10cm 程で赤色顔料は他の部分と比べ赤色が強い。断面からも小口部は丸形だと確認でき赤色が他より強い。断面 C' 側の深さは 10cm ほどで形は方形である。墓坑の深さは場所により 6~14 cm 程の違いがみられる点からのちに削平をうけている可能性が高い。また、大腿骨の骨片と頭蓋骨の骨片が発見され骨片には赤色顔料が付着していた。同時に奥歯もみつかった。これらは、攪乱坑内から発見され原位置はとどめていない。

調査成果

今回の調査成果に関しては以下のことをあげることができる。

石棺の身は見つからなかったが赤色顔料をともし



第 5 図 大久保 2 号墳 墳頂部トレンチ(1/50)

う凝灰岩片が散見されるため、石棺の身は基盤層を削り抜いてつくられたと考えられる。墓坑の平面形は小口部において半円形をなし、石棺蓋の平面形に合わせてつくられたと考えられる。(大矢)

大久保3号墳

これまでの調査によって大久保3号墳は、墳形は未確定ながら10m程度の円形の小規模墳であって、葺石等の構造物はなく、厚さ 30cm ほどの盛土によって墳丘が構築されたという所見が出されている。主体部はその盛土の直下に平たい板石を蓋として構築されていた。第1次調査時の所見では、蓋石は硬質の凝灰岩で、2つの石を並列して並べたもので、調査した部分には縄掛突起状の突出が削り出されていた。これは箱式石棺の蓋石には認められない特徴であった。またトレンチの断面層序を検討すると、盛土の上から一方のみの蓋石に向かって掘方が確認された。これはいったん蓋石をおいて埋葬完了後盛土を行った後に、再度墳丘上から鍬を入れ蓋石の一方を開けるために掘り込んだものと考えられた。そうすると、蓋石に突起がついていることも、再度蓋石を開けるためと合理的に解釈できる。

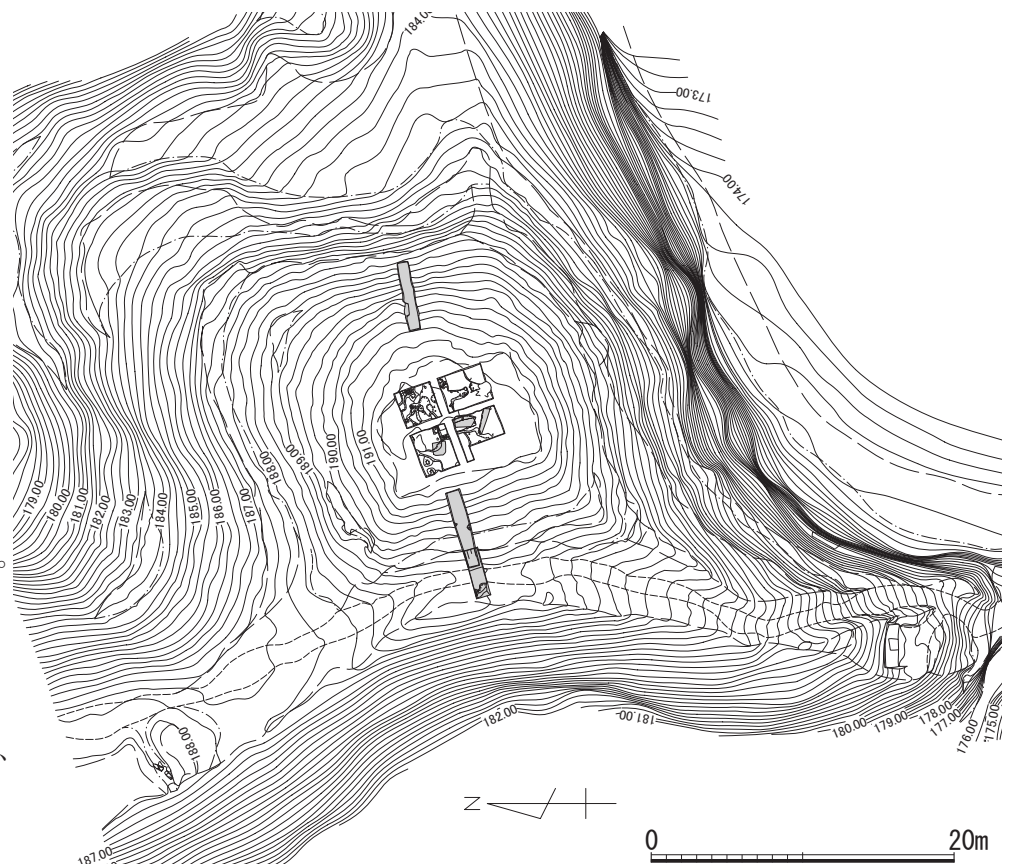
しかし第1次調査では出土遺物もなく、時期の判定ができなかった。また先ほどの解釈を実証するためには内部の埋葬の状況から追葬を明らかにする必要があると考えた。そのため今回の調査では蓋石の状況を確認するために内部の予察をおこなった。

調査成果

第1次トレンチの埋葬施設部分を再掘削したのち、西側に向かってトレンチを拡張し、突起のついた蓋石1枚をすべて露出させた。その結果突起は小口方向に二カ所あることを確認した。また墓坑を確認した。さらに蓋石から内部をのぞいたところ、埋葬施設内部は凝灰岩の基盤層を直接長方形に掘り込んだ、いわば丁寧な石蓋土坑墓といえるものであることが判明した。内部には人骨や遺物等は確認できなかったが、赤色顔料が濃く塗られていることも判明した。底面は薄い土壌でおおわれており、来シーズンに調査を継続することとした。(田中)

城山古墳 (第6図)

城山古墳は、発見時には円墳と考えられていたが、1次調査で行われた測量の結果、方墳の可能性が指摘された。第4次調査において墳頂部から検出された墓坑の深さから推測すると、墳頂部は築造後に1m以上の削平を受けていることが明らかになり、大規模な削平を受けたことが判明した。さらに西側の、方墳と考えた要因でもある隅角に挟まれた一面も、基盤層に達する削平が考えられ、中世に山城の造作の際に

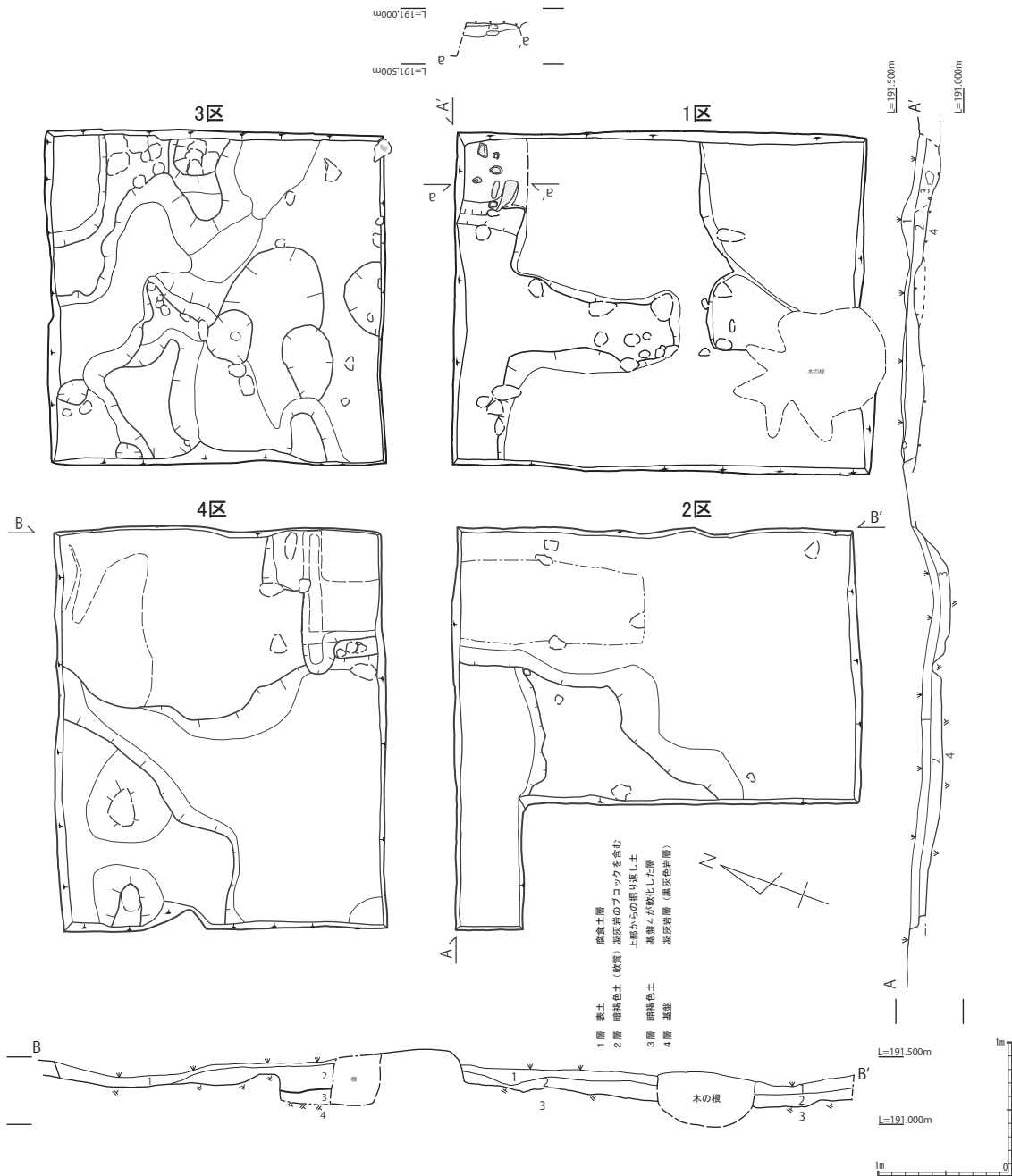


第6図 城山古墳の調査区配置(1/500)(玉川作成)

削平をうけた可能性がでてきた。したがって城山古墳の現形は、大きく改変を受けていることが判明し、隅角のない東側の平面形からみて、円墳である可能性が高まった。

墳頂部グリッド (第7図)

昨年の第4次調査では、主体部調査のため、墳頂部に第4トレンチとして、幅50cmの十字のベルトを残し、計4区画に分割した調査区を設けた。墳頂部は凝灰岩製の石棺材が露出していることは以前より知られていたが、中央部から墓坑の底部の輪郭が確認された。周囲からは、高坏の口縁部と脚部それぞれ古墳時代前期の土師器片の出土がある。



第7図 調査区平面図(1/50) (中原作成)

墓坑の痕跡内の凝灰岩の断片や墳頂部の東側から赤色顔料の塗布された礫が発見された。調査区の中央部にある第1主体部は長さ約180cm、幅約80cmで南北に向いている。1区東側から赤色顔料を塗布した凝灰岩が出土し、それを根拠とし第2主体部を設定した。第2主体部の断面をみると5cmほどの深さを確認できた。第2主体部は残存部として長さ約60cm、幅約60cmである。

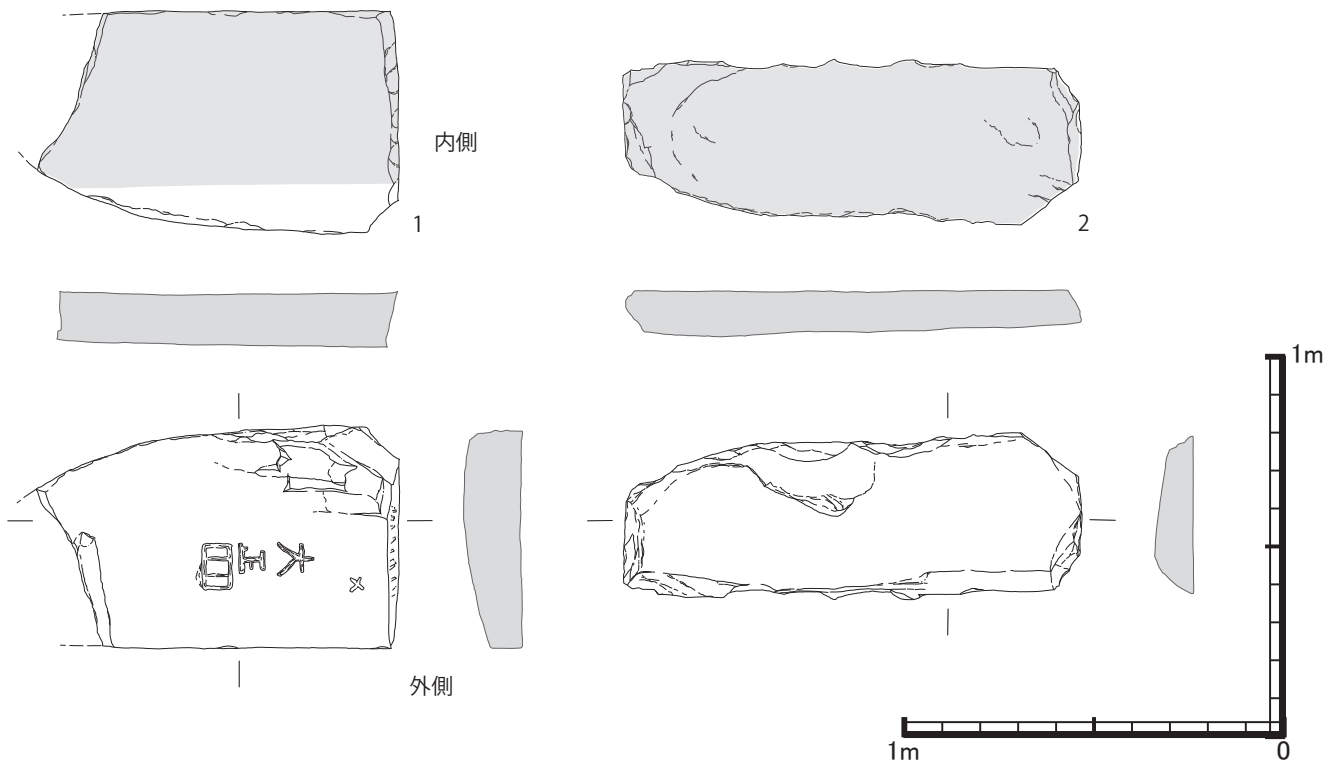
第4次調査で墳頂部調査区の掘り下げまで終わったので、第5次調査では調査区と主体部の写真撮影と平面図の実測および、断面土層の実測を行い、その後埋め戻しをおこなった。石棺材については後に記載する。(中原)

城山古墳の石棺材

城山古墳には、以前から墳頂部に3つの石棺材の存在があることが確認されており、いずれも凝灰岩製で古墳に伴う棺材であると考えられる。また、城山古墳の付近を流れる水路に石棺材と思われる石材が2つ確認されている。第5次調査ではこれら城山古墳墳頂部、水路上に存在している石棺材について実測を行った。

石棺材No.1 (第8図-1)

組み合わせ式の箱式石棺の側板と考えられる棺材であり、断面形態は翼状の一枚石である。横幅は85cm、縦幅は141cmで、厚さは20cm程度だが上面にかけて細くなり12cm程度になる。石棺材の外面には幾つかの加工痕が残されており、見た目の違いから2種類に分けられる。1つは叩き潰したような整形面である。もう1つは自然面をそのまま利用しながら、ノミによる整形を行ったと考えられる面が見られる。また、外面には「大正四」と「×」の彫り込みがなされており、当時の発見者によって彫り込まれたものであると考えられる。内面はやや内側に湾曲しており、赤色顔料が塗布されている。また、土に埋まっていたと考えられる下面の約20cmの範囲には赤色顔料の塗布が見られない。棺材の端部には両面ともに、縦方向の工具による加工痕が見られる。



第8図 石棺材No.1・2 (1/20)

石棺材No.2 (第8図 - 2)

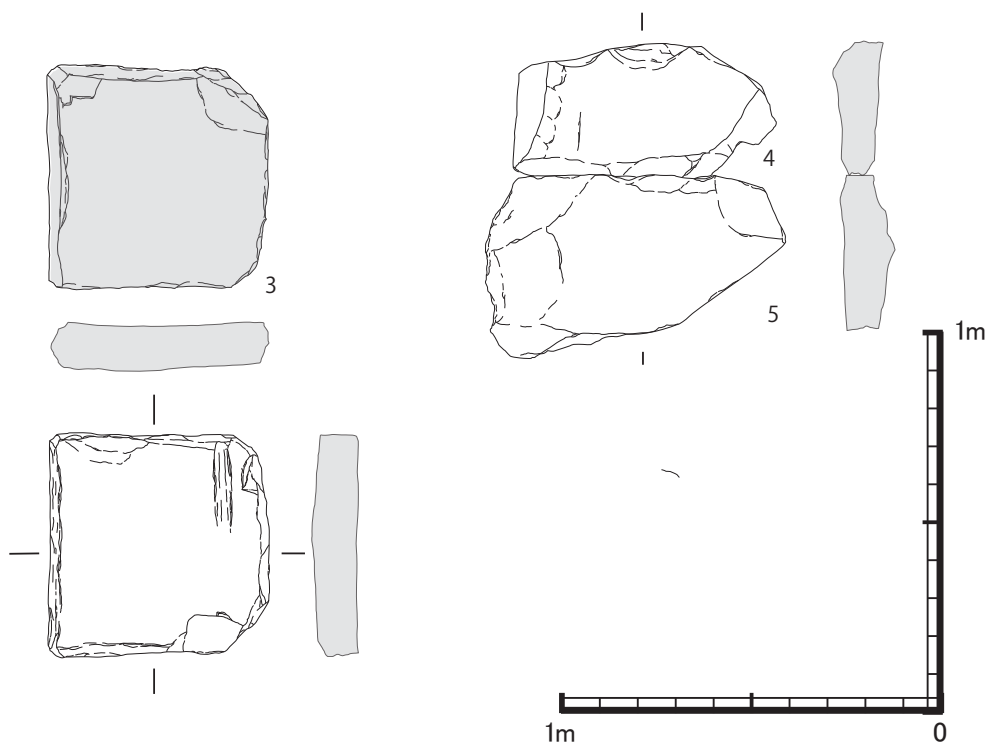
棺蓋ではないかと考えられる。横幅は62cm、縦幅は178cmで、厚さは15cm程度である。石棺材の外表面には叩き潰したような加工による整形面がみられ、側面は平たく整形されている。内面はやや内湾しており、全面に赤色顔料が塗布されている。

石棺材No.3 (第9図 - 3)

側板ではないかと考えられる棺材で、横幅は86cm、縦幅は85cmで、厚さは18cm程度である。外面は平たく整形されている。また、一箇所後世のものと思われる柄(ホゾ)が施されている。内面も平たく整形されており、全面に赤色顔料が塗布されている。また、側面の割れと思われる部分にも赤色顔料が付着していることから、石棺加工当時の加工面である可能性が考えられる。

石棺材No.4、石棺材No.5 (第9図 - 4・5)

城山古墳の付近を流れる水路の上に置かれている棺材である。形態から、石棺のどの部分に使われていたのか不明である。石棺材No.4は横幅60cm、縦幅116cm、厚さ20cm程度の棺材で、石棺材No.5は横幅51cm、縦幅102cm、厚さ18cm程度の棺材である。(村田)



第9図 石棺材No.3・4・5(1/20)

まとめ

2015年におこなった第5次調査によって成果をまとめると、大久保1号墳については後円部墳頂には小円礫の堆積が認められたことが成果である。墳頂部全体に敷かれたものか、主体部上に積まれたものかは判然とせず、次回に課題を残した。

大久保2号墳では攪乱土中に石棺の身にあたる石材が全くなく、かわりに石棺蓋石の大きさに対応する土坑の底部を確認したことは特筆される。石棺蓋の内面の刳抜部の平面形が小口部において円形をなすのに対応して、土坑の小口部もまた円形である。石棺蓋土坑墓ともいえる主体部になる。

大久保3号墳も蓋石下部の墓坑は石材の組み合わせではなく、凝灰岩の地山掘削によるものである可能性が高くなった。

城山古墳について4次調査までですでに中世末の山城による改変が著しく、複数の箱式石棺をもつ小円墳と考えるに至った。

なお漆生古墳群の調査は日本学術振興会科学研究費助成事業(基盤研究B)「阿蘇地域を中心とした古墳時代の九州島における情報伝達、文物交流の実証的研究」(研究代表者:杉井健 課題番号26284122)の成果の一部である。(田中)

註

(1) 別府大学特任教授平尾良光氏の分析による。

(2) 諸岡郁・玉川剛司・田中裕介 2014「Ⅱ 漆生古墳群」『豊後大野市内遺跡発掘調査概要報告書4』豊後大野市教委

諸岡郁・玉川剛司・千原和己・田中裕介 2015「Ⅱ 漆生古墳群」『豊後大野市内遺跡発掘調査概要報告書5』豊後大野市教委

諸岡郁・玉川剛司・井大樹・安部和城・江口寛基・中嶋小春・田中裕介 2016「Ⅱ 漆生古墳群」『豊後大野市内遺跡発掘調査概要報告書6』豊後大野市教委



遠景



大久保1号墳 検出状況



大久保2号墳 墓壇



大久保2号墳 小口部



大久保2号墳 土層断面 (C・C')



城山古墳 墳頂 (北西側)



城山古墳 墳頂 (北東側)



城山古墳 土層2区北

漆生古墳群写真図版2



城山古墳 土層4区東



城山古墳 土層2区東



城山古墳 土層1区北



城山古墳 土層1区第2主体部



城山古墳 石棺1外側



城山古墳 石棺1内側



城山古墳 石棺2



城山古墳 石棺3

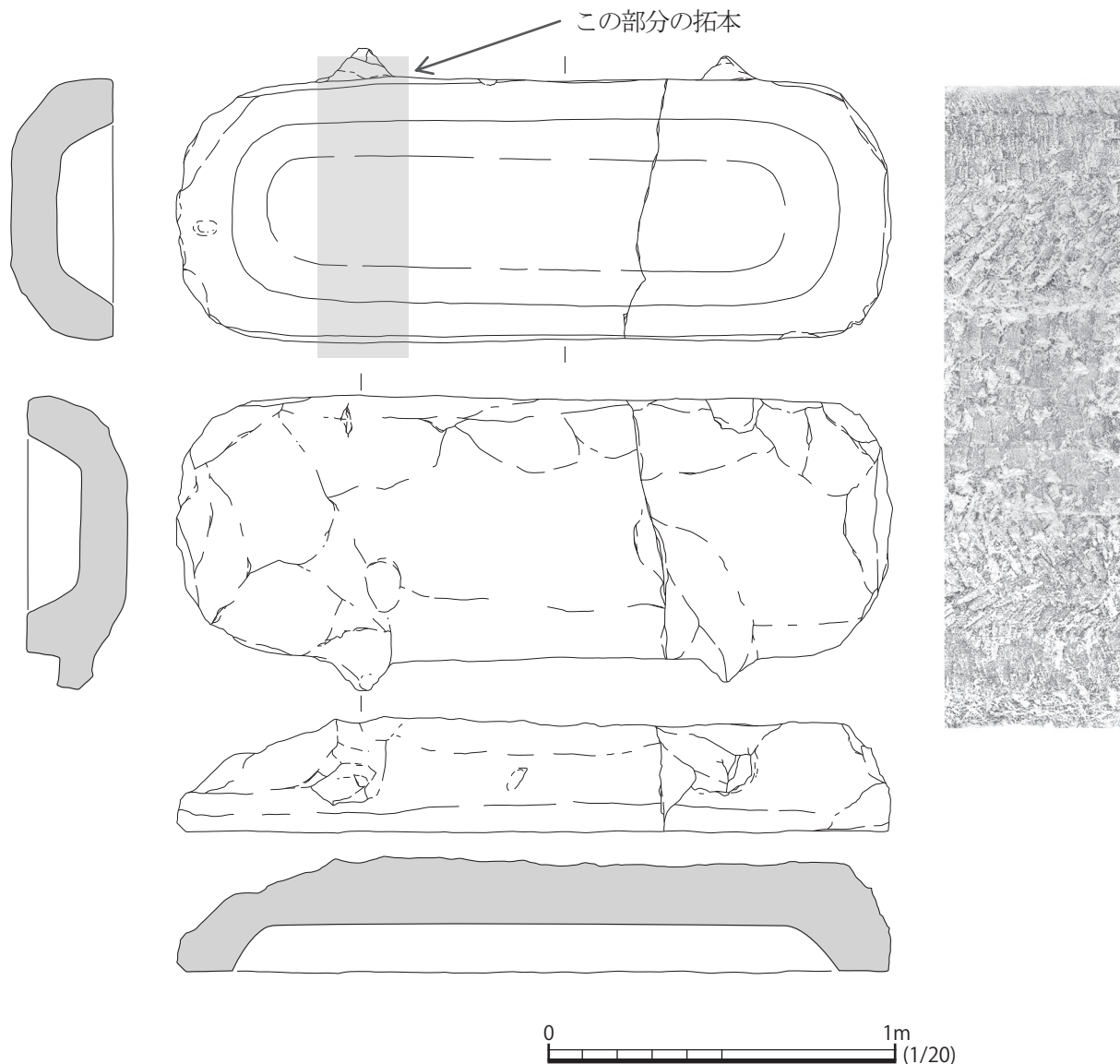
3 大久保2号墳の石棺蓋

井大樹（大分県教育庁埋蔵文化財センター）

大久保2号墳の石棺蓋は、現状墳頂部中央よりやや北側に伏せた状態で安置されており、調査時には3分の2程度のところで2つに割れていた。また、外面は長年の風雪により剥離が激しく調整の痕跡等は確認できる状態ではなかった。石材は阿蘇溶結凝灰岩でやや硬質であり、所々に5cm程度の軽石がみられる。ここでは調査時に蓋の内面状態等を詳細に確認できたので、主にその成果について報告したい。

蓋の全長は205cmで、幅は75cm程度である。側辺部に2個ずつ、計4つの縄掛突起が付き、残存状態の良い縄掛突起の観察から、角柱状もしくは台形状の形態でやや下垂するのではないかと考えられる。外面は風化が激しいが大まかな形は把握でき、外面上部が比較的平坦な構造をしていることがわかる。また、側辺部の外面端には5cm程度の帯状の加工痕があり、やや内傾している。

内面は外形と同じ形に削り抜かれ、小口が隅丸である点は特徴的である。内面天井部には荒く手斧状の工具で加工した跡が残り、側辺部内面では手斧状の工具で小口内面へと連続的に加工していることがわかる。特に端部平面には丁寧な手斧加工が見られ、先ほど述べた側辺部外側の加工も含め仕上げの意味で最後に面調整を行ったと考えられる。さらに、内面には赤色顔料が全面に見られ、形状と合わせて昨年報告した主体部との関係を考える上で重要である。



第10図 大久保2号石棺

4 漆生古墳群の立地について

村田仁志

1) はじめに

漆生古墳群は大分県豊後大野市緒方町越生(こしお)地区の大野川沿岸を見下ろす丘陵上に所在しており、前方後円墳1基を含む4基の古墳群が尾根地形上に並ぶように分布している。これらの古墳が築造された時期については推定ではあるが4世紀から5世紀とされている。また、漆生古墳群の城山古墳が立地する尾根の南岸壁には城山横穴墓群が確認されている。また、城山を含む尾根北側には、中世に山城である鶴ヶ城が築かれていたことがわかっている(註1・2)。今回は、これらの古墳群の成立背景にある要因について古代越生平野の様相と、古代の交通の2つの視点から考察を行った。

2) 近世以前の越生平野の様相

まず、古代越生平野の様相について述べる。漆生古墳群が見下ろす越生平野は、現在水田開発が行われているが、その起源は古代まで遡るものではなく、江戸期に緒方上井路が通水した後に行われるようになったようである。『清川村誌』に江戸時代のこの地域の様相を記した『加藤文書』が紹介されており、江戸時代の享保の飢饉の記述が見られる。文書には上自在村や打越村で凶作によって多くの死者が出たことが記されている。この飢饉によって多くの死者が出た理由として、越生平野の立地が大きく関係している。越生平野は大野川と緒方川に挟まれており、双方の河川によって阿蘇凝結凝灰岩の冠する台地が激しく浸食されたことによって誕生した小規模な丘陵上に位置している。つまり、立地としては大野川岸に位置しているが、川よりも標高が高い土地であるため河川から水を得ることに適さず、使用可能な水系は迫の奥に存在するイノコから流れ出る小規模な川などに限定され、水田を育むには不十分な環境であったと考えられる。このことから越生平野は、仮に大野川の水を利用出来たととしても、川に隣接する一部の土地のみで水田開発が行える程度であり、生産力は望めなかったと考えられる。その上、小字を見ても緒方川流域には田の付く字名が多く存在していることに対して、越生地区には森田という字名以外は、迫・畑・原がつく字名が多く見られることから、緒方において稲作が開始される中心地は後に緒方荘が開かれた緒方川流域であり、古代・中世の越生平野は現在のような稲作中心の土地利用は行われてはいなかったのではないかと考えられる。したがって、漆生古墳群が築造された当時の越生平野においても米の生産力は期待出来ず、古墳の築造の背景に生産力が関係しているわけではないという結論に至った。

3) 渡河地点としての越生平野の考察

次に古代・中世の交通について、古代の大野川流域は瀬戸内・東九州・中九州を繋ぐ交通上の要衝であったことが考えられているが、古代・中世の大野郡は平地が少なく『豊後国風土記』大野郡の条に「此の郡のすぶる所はことごとく皆原野なり」とあるように、尾根や台地が点在する特徴がある。平地が少ない中で、尾根や台地の上は一定の平地が広がっていることから、この地形環境を利用して古代・中世の道は作られており、尾根と尾根・台地と台地を結ぶようにして道が発達していったと考えられる(註3)。また、この地域において尾根と尾根の間に流れる川を渡れる場所は限られており、渡河点は交通上重要な役割を果たしていたと考えられる。そのため道や渡河点は、それらを見渡せる高い場所に権威をアピールするための古墳の成立と深く関係していると考えられている。

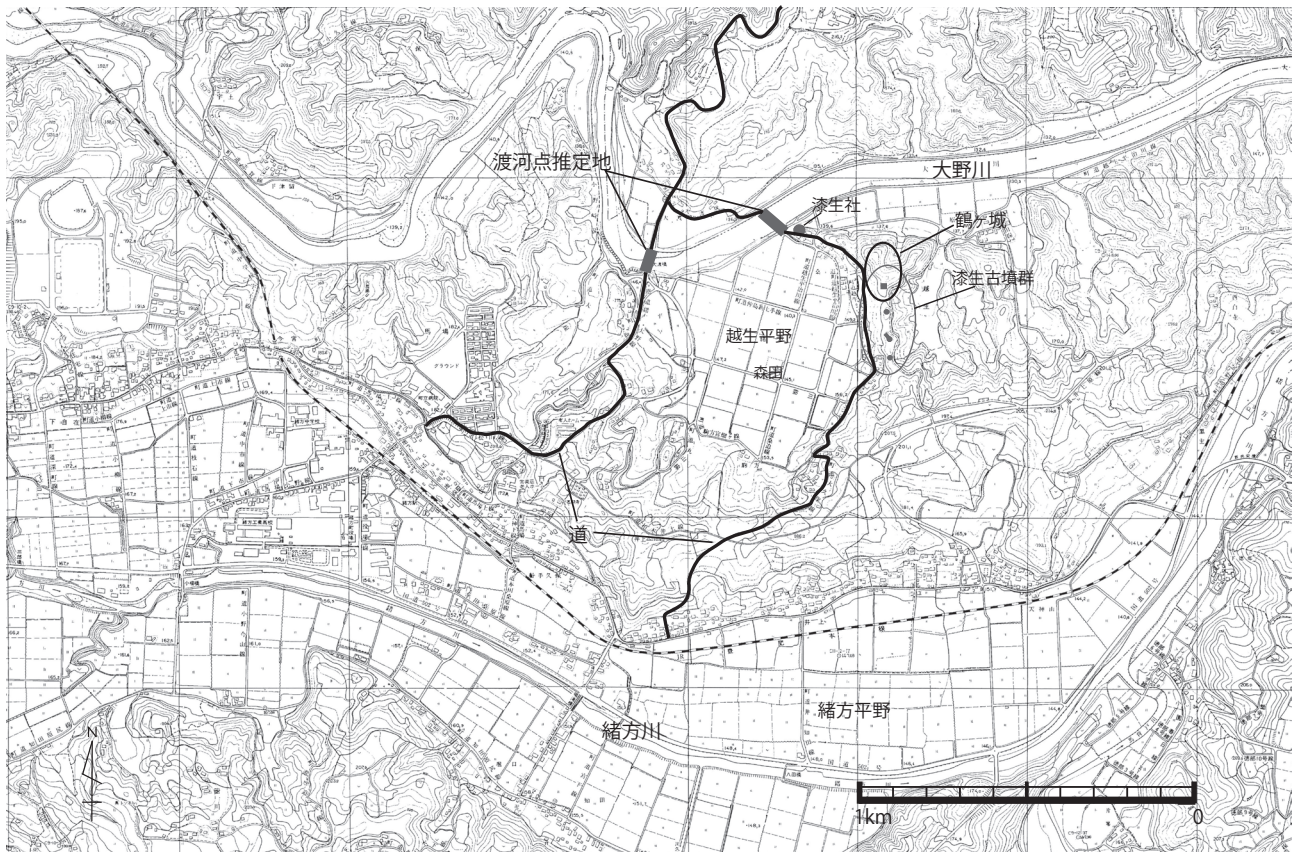
漆生古墳群が位置する越生地区には、大正12年に大渡(おわたり)橋が出来るまで2つの船渡し場があったようである。その地点の一つに現在の大渡橋付近が考えられ、大野川を挟んで対岸の大渡には大野川に竹を編んで筏のようにして浮橋が設けられていた(『豊後国誌』)という記述があることから、古くから渡河点として人々

が利用していた可能性がある。もう一地点については深渡しと浅渡しがあったとされていることから、大渡橋よりも下流の越生平野東端部にあったのではないかと考えられる。

この渡河点が繋ぐ道は、航空写真や字境図などを基に見てみると現在の大渡橋から南に続く尾根の東側を通過して下自在に向かって続く道や、橋を北上し現在の朝地町方面に続く道が確認できる。この朝地方面へと続く尾根道は、夏足(なたせ)台地～朝地～竹田へ続く尾根道につながっており、丸山古墳や用作(ゆうじゃく)古墳などもこの尾根道に沿うように立地していることから古墳時代の主要路であったと思われる。また、この地域の大野川流域において渡河点として考えられる地点が地形上、他に考えることが出来ないことから漆生古墳群が見下ろす渡河点は緒方川流域から朝地方面へ抜けるための重要な地点であったと考えられる。

4)まとめ

前述した内容から、古代の越生平野は古墳が成立する背景になりえる程、米の生産力が高かったとは考えにくく、古代の道考えた際の交通の要衝「渡河点」としての役割を担っていた可能性が高いと考えられる。そのため、漆生古墳群が大野川を見下ろせる尾根上に成立した背景として「渡河点」の存在があり、この交通の要衝から見える位置に権威のアピールをするために古墳が築造されたのではないかと考えるに至った。また、中世にこの尾根上に山城が築かれた背景にも「渡河点」の存在が大きいと考える。



第11図 立地図面

註(1)大分県教育委員会編『大分の中世城館 第四集 総論編』 2004年。

註(2)緒方町立歴史民俗資料館緒方町誌編纂室編『緒方町誌 総論編』 2001年。

註(3)飯沼賢司編『環境歴史学的視点に立つ中世荘園研究 - 大分県直入・大野郡域を中心に』別府大学 2005年。



大久保2号墳 石棺



大野川渡河点推定地（左：西方、右：北方より撮影）

Ⅲ 坊ノ原古墳

1 調査の経過

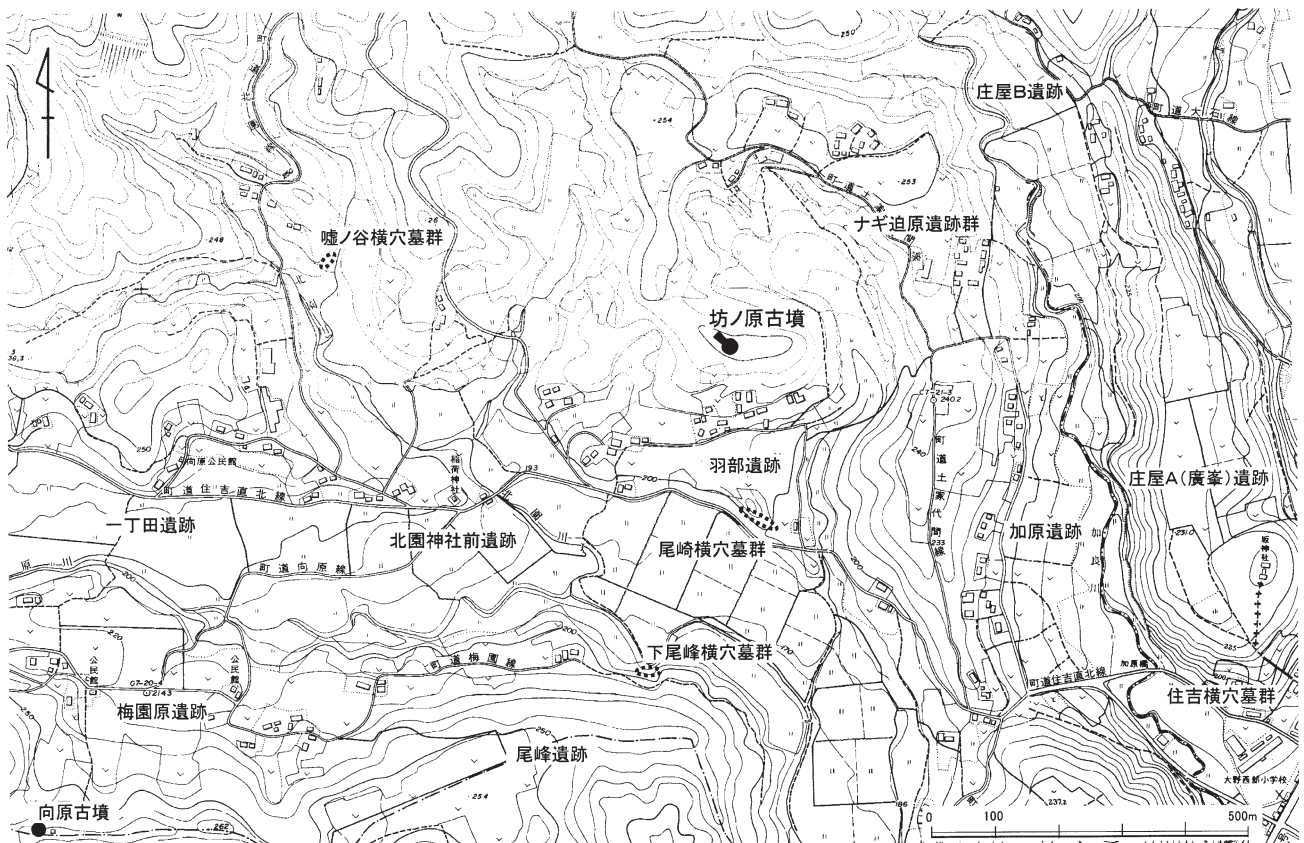
大野町桑原区の標高約 250mの丘陵上に所在する前方後円墳で、平井川の支流である向原川沿いの谷底平野を見下ろす立地環境である。同じ向原川流域には1.5km 南西に所在する円墳の向原古墳のほか、尾崎横穴墓群・下尾峰横穴墓群・嘘ノ谷横穴墓群などの遺跡が点在する。古墳時代の集落跡は500m南東の加原遺跡で確認されている。

通称ひょうたん塚と呼ばれて古くから存在は知られており、前方部上に祠があることから地元では信仰の対象でもある。昭和 51 年度の測量調査で全長 45mの規模であることが確認され、後円部の南側から西側にかけての削平痕と、前方部の祠などによる改変があるほかは良好に保存されているとみられている。また、後円部墳頂に明治時代の盗掘跡と伝えられる窪みがあり、その経緯や出土遺物などは知られていない。墳丘上の施設として葺石と思われる礫は確認されているが、周溝などは地形上からは確認できない。時期を推定できる手掛かりに乏しいが、後円部に比べ前方部が低く細長い墳丘形態から前期の築造と考えられている。(清水 1977) (賀川 1980)

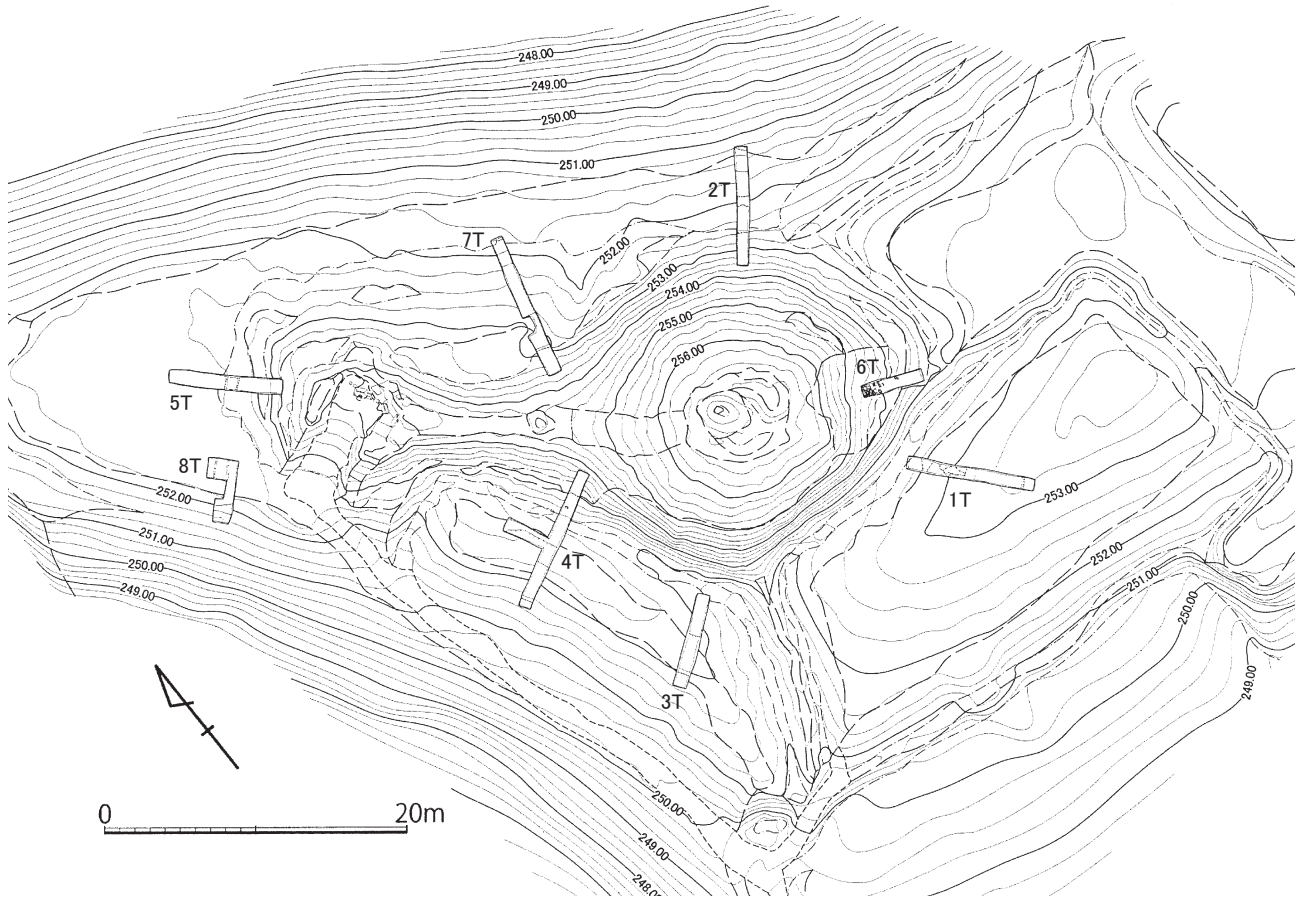
約 40 年を経過して、平成 26 年度に範囲確認調査の計画に先立って、坊ノ原古墳の詳細な墳丘測量を実施した。前期古墳と同じ形態の柄鏡形の墳丘地形を測り、後円部の一部に段築らしい平坦面や墳丘北側に墳端テラスと推定される地形が確認されている。(玉川 2016)

なお、主体部の石棺材と伝えられている石材が集落の井戸蓋に利用されていたが、現在は前方部上に移されている。安山岩質の板石3枚のうち2枚には側面の一部に加工調整痕が確認でき、箱式石棺の一部と推定される。(井 2016)

平成 27 年度は遺跡範囲や築造時期の把握のため、墳端にトレンチを設定して確認調査を行った。トレンチは当初5箇所の手配であったが、墳端を示す葺石などの遺構が確認できず、また遺物の出土数も乏しい状況のためトレンチを追加して計8箇所調査を実施した。しかしなお不十分でもあり不明な点も残しているため、翌 28 年度に2次調査として継続している。



第12図 坊ノ原古墳周辺地形図



第13図 坊ノ原古墳1次調査トレンチ配置図(玉川作図)

2 確認調査の概要

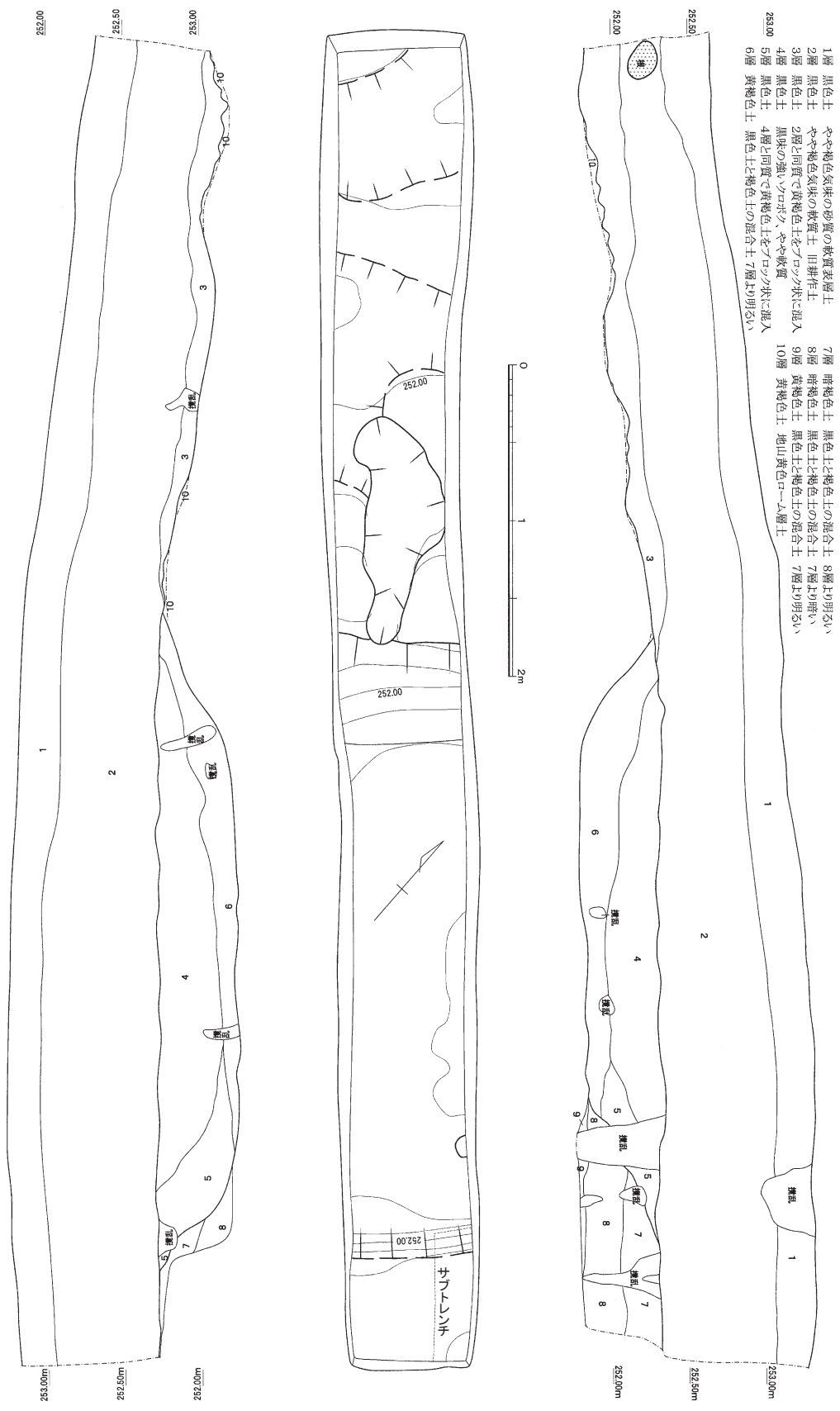
第1トレンチ 後円部南東側の墳端検出を目的に長さ 8.6mで設定した。長方形に区画されている畑地跡の山林で、後円部の一部が掘削されているとみられており、地表の樹木を避けるようにして掘り下げを行った。

表土から深さ 80cm の攪乱土層があり、その攪乱から免れるようにして溝状の掘込みを検出した。幅は4m、検出面からの深さは 50cm、溝底は標高 251.75m程のほぼ平坦で断面は逆台形状である。内部には黒色土(4層)の堆積があるが、葺石と思われる礫や遺物等は出土していない。墳丘側は約 40° の傾斜でローム層を掘り込まれており、外側はそれよりやや急傾斜であることから周溝とみられる。しかし、外側の傾斜面は墳丘側より色調的に暗い褐色土であり、地山ローム層ではなく盛土の可能性も考えられることからサブトレンチを設定して掘り下げたものの、攪乱が著しく判断できないままであった。地山層であれば幅4mの溝端となるが、盛土層であればさらに外側に周堤の可能性も考えられることから、次年度の継続調査で拡張を行い、再度確認を行いたい。

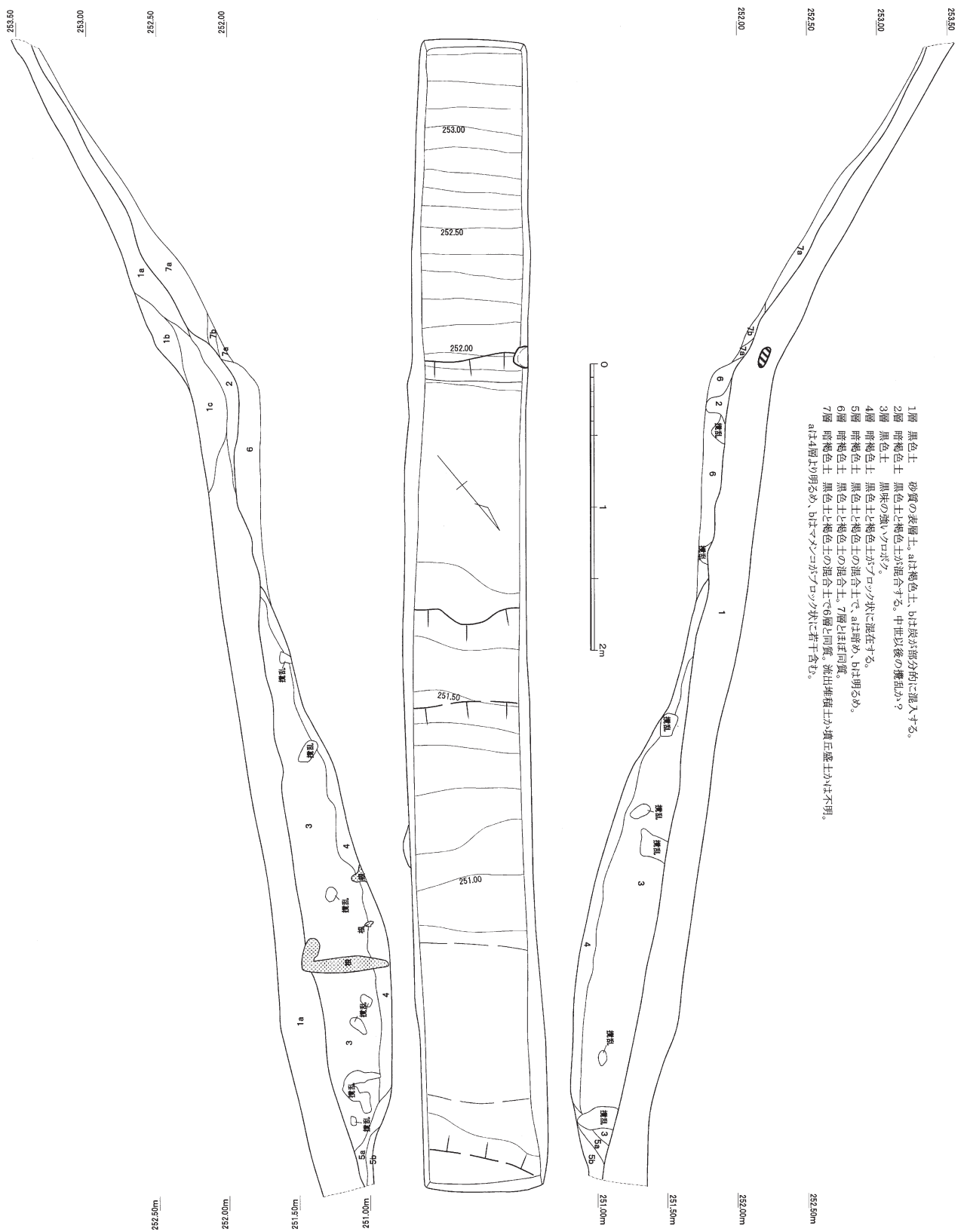
第2トレンチ 後円部北東側の墳端検出を目的に長さ 8.1mで設定した。北側へ傾斜する山林内で、地形的にも当初の墳丘の形状を残していると見られている。墳丘盛土状の土層を検出したが、葺石らしい礫はほとんどみられず、転落している様子もなかった。墳丘端付近に攪乱跡がみられたが墳形を損なうほどの大規模なものではなく、出土遺物から中世以降のものとみられる。

なお墳端より北側 1.5m離れた位置で浅い溝状の掘込み地形を検出している。墳丘側は約 20° の傾斜で緩やかに続き、外側はわずかに立ち上がってそのまま自然地形上へ続いている。幅は4mを測り、自然地形の傾斜に沿った造りで、溝底は最も低いところで標高 250.84mである。覆土は黒色土(3層)の堆積があり、周溝と思われる。

遺物は中世の熙寧元宝が出土したが、古墳に伴う遺物は全く出土していない。



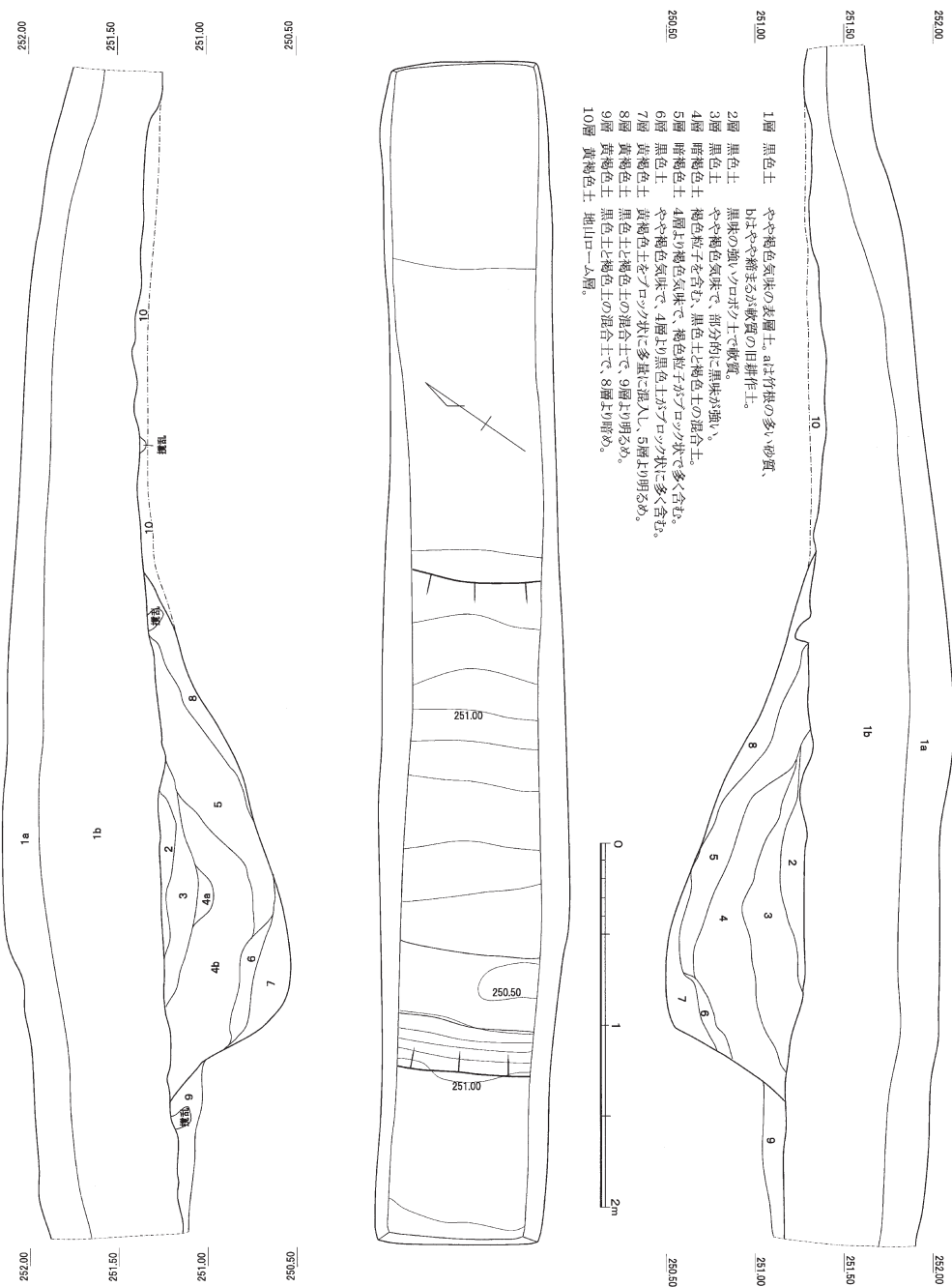
第14図 坊ノ原古墳第1トレンチ実測図



第15図 坊ノ原古墳第2トレンチ実測図

第3トレンチ 後円部南西側の墳端検出を目的に長さ 6.5m、幅1mで設定した。長方形に区画されている畑地跡で、後円部の一部が掘削されているとみられており、やや起伏のある平坦状の地形上に掘り下げを行った。

表土から深さ 80cm の攪乱土層があり、墳丘掘削面から4m離れた位置で周溝と思われる遺構を検出した。溝は地山ローム層を掘込まれており、幅は3m程で、検出面からの深さは 70cm で覆土は黒色土層等の堆積があり、溝底の標高は 250.50mである。溝の断面はV字状で、墳丘側の傾斜は約 23° で緩やかになっているが外側は約 60° の急傾斜となっている。墳端の遺構は失われており、葦石と思われる礫も見られず、遺物は全く出土していない。



第16図 坊ノ原古墳第3トレンチ実測図

第4トレンチ くびれ部南側の墳端検出を目的に第3トレンチと同じ畑地跡に東西に長さ 10.1mで設定し、掘り下げを行った。くびれ部の把握のため、北側に長さ 2.9m張り出すように追加してT字状の調査区とした。

墳丘側は表土の下に盛土層を検出したが、葺石と思われるような礫はほとんど検出していない。墳端より外側は表土から深さ最大 1.1mの攪乱土層があり、墳端より約2m離れた位置で周溝と思われる掘込みを検出した。周溝はローム層からマメコ層(久住軽石層)を掘り込まれており、溝幅は 4.2m、検出面より深さは 90cm、断面は逆台形状で覆土は黒色土(4層)の堆積があり、溝底の標高は 250.56mである。墳丘側は約 28° の傾斜で緩やかになっているが外側は約 44° とやや急傾斜になっている。墳端の遺構はなく、葺石も転落している様子も見られない。

なお、周溝の平面形態として、拡張部分で内側掘り込みラインを検出しているが、ゆるやかに屈曲して前方部へ向けて広がるように続く様相が見られたことからくびれ部分と思われる。

遺物は図示できるほどの大きさではなかったが、4層の黒色土層下部より土師器および須恵器破片を数点検出した。

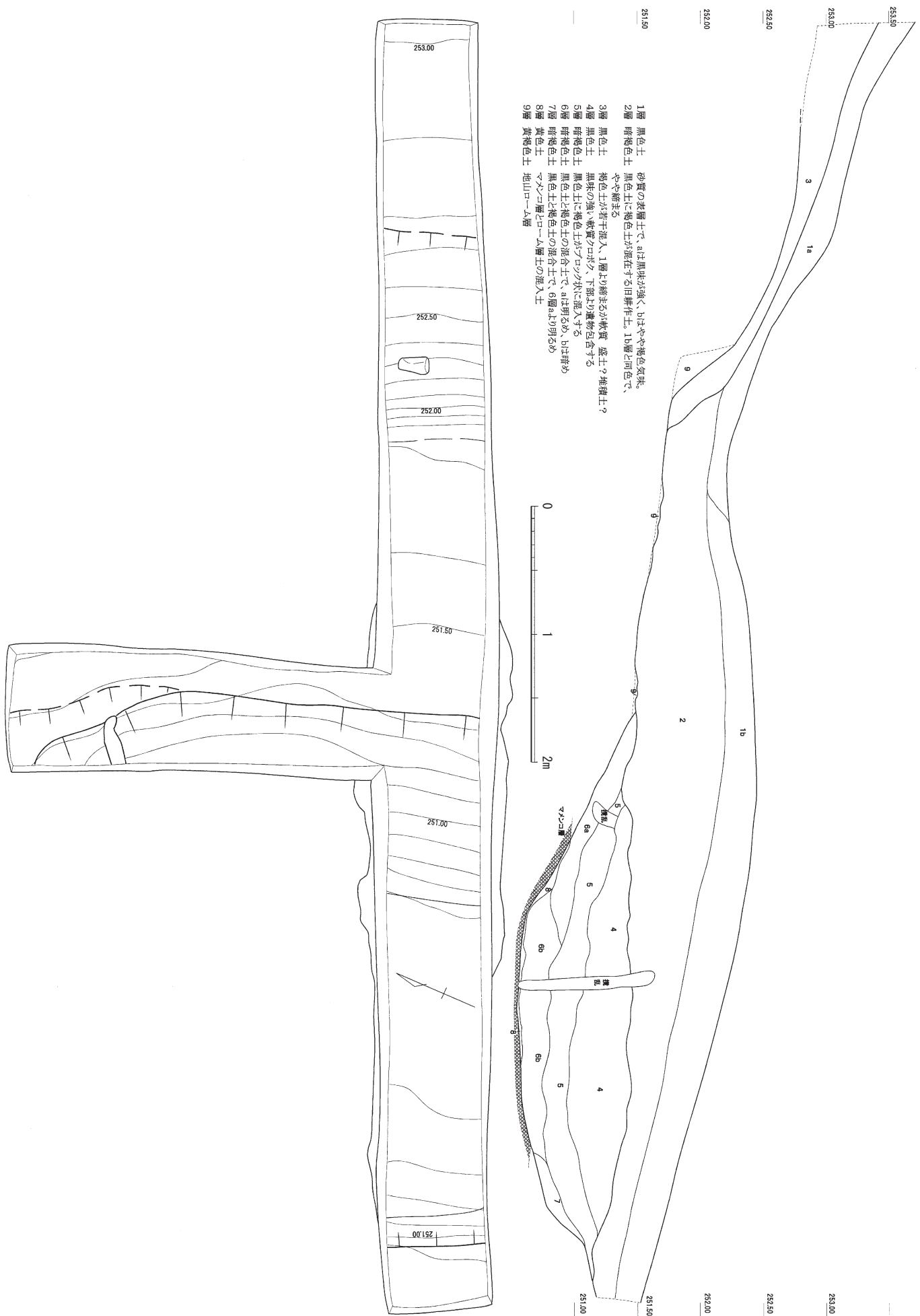
第5トレンチ 前方部前端的な墳端検出を目的に長さ 7.7mで設定した。尾根地形上へ続くほぼ平坦地の山林内で、墳丘の形状を残しているとみられていることから、墳端位置から約1m墳丘側から掘り下げた。

墳丘側の表土下に墳丘盛土層と思われる土層を検出したが、葺石と思われるような礫は検出していない。また墳丘外側は表土直下にマメコ層を検出し、大幅な削平後に墳丘を構築していることが推定される。

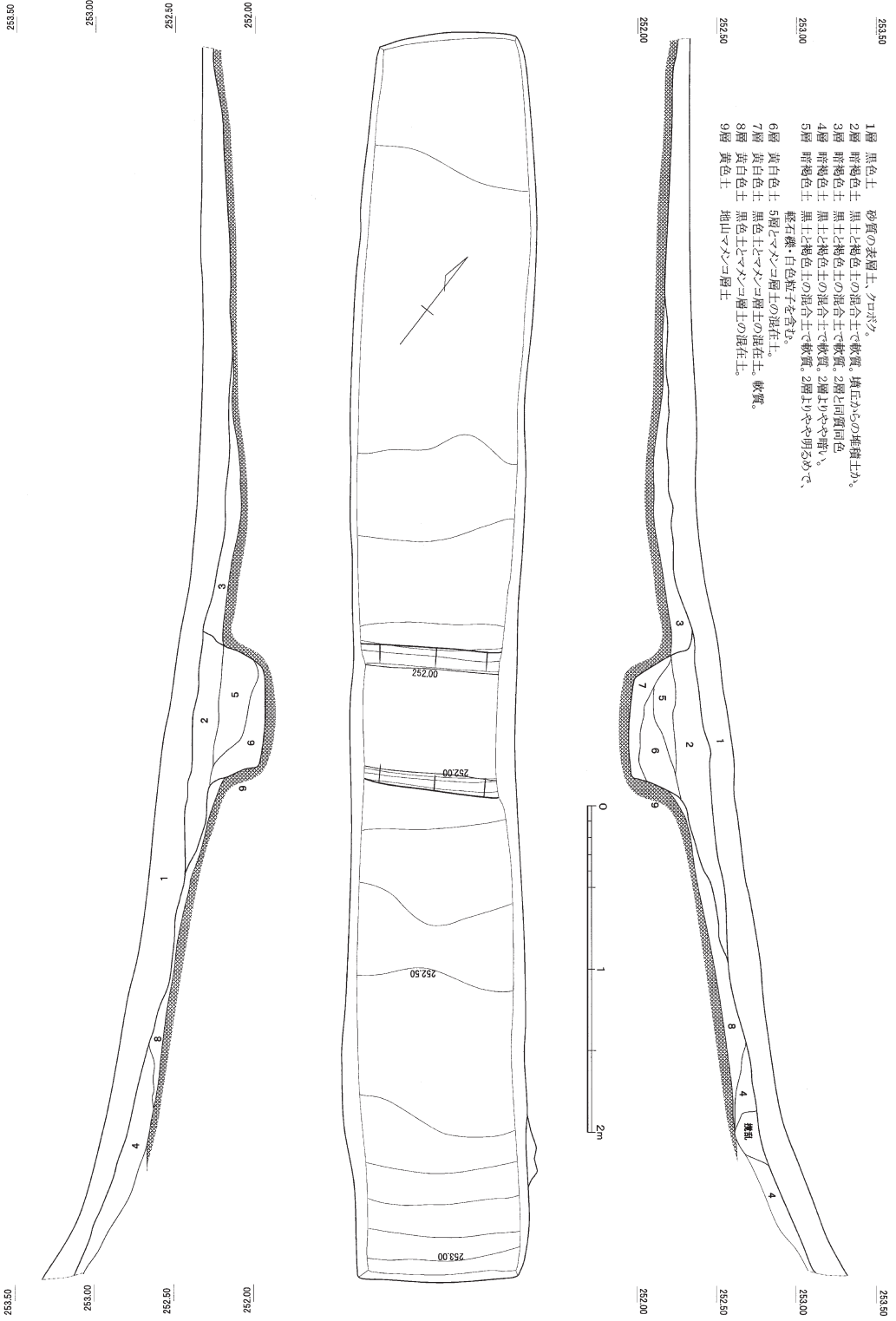
地表面の墳端より外側約2m離れた位置で溝状の掘込みを検出した。溝はローム層及びその下層のマメコ層を掘り込んであり、溝幅は 90cm、検出面より深さは 35cm 程の小規模である。断面逆台形状で、覆土は褐色土が多く混入する覆土の堆積があり、溝底の標高は 251.94mである。黒色土層は見られず、他のトレンチで検出した周溝とは規模や土層など様相は異なる。遺物も全く検出していない。

第6トレンチ 墳端のトレンチで全く葺石を検出することができずその残存状況確認を目的に、葺石と思われる礫が多くみられる後円部東側墳丘上で、長さ 4.2mで設定し掘り下げを行った。傾斜面が緩やかで唯一段築テラス状の地形が確認できる位置でもある。

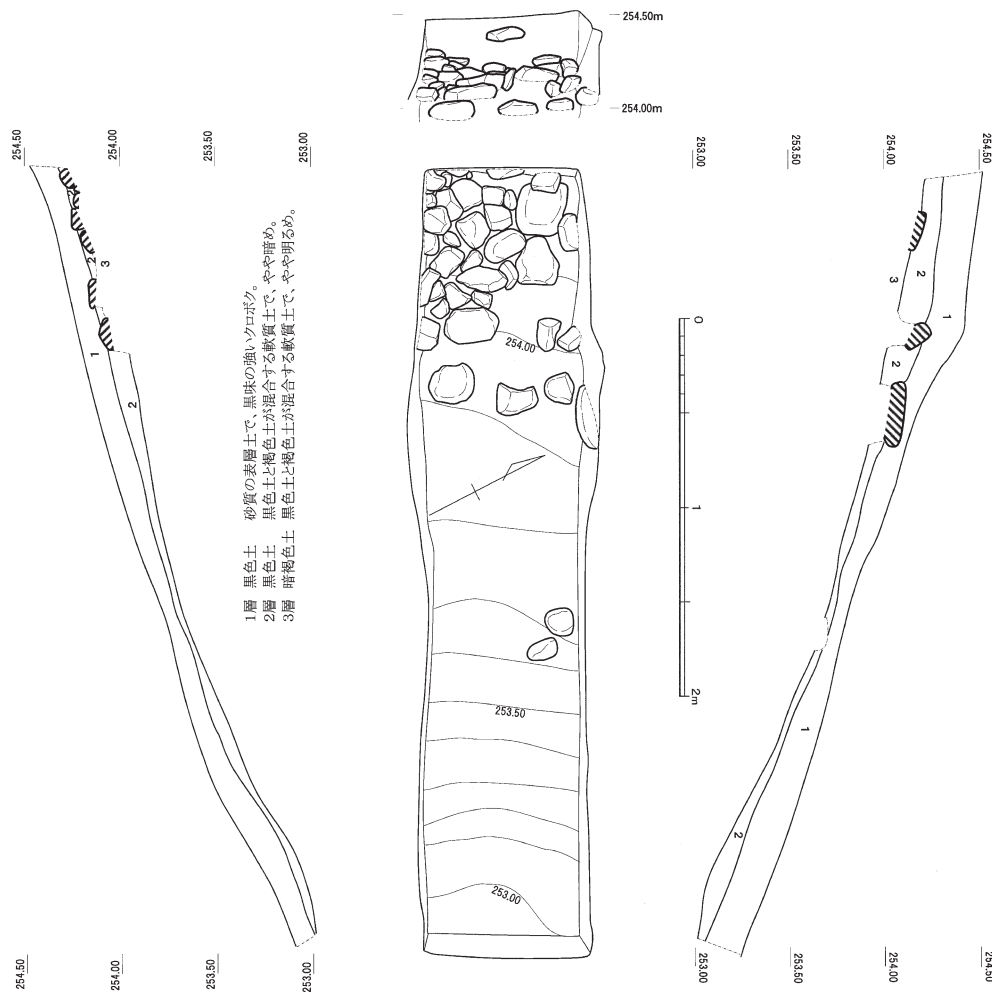
標高 253.70m付近より上のトレンチ西側のテラス付近の緩やかな傾斜面で多くの礫を検出することができた。礫は拳大から人頭大程の河原石が多く集められているが、葺石として敷き詰めた状態ではなく移動されている可能性が高いとみられる。出土位置もテラス部分の一部しか遺存しておらず、下位の墳丘斜面上は転落石と思われる以外の礫は検出できなかった。遺物も出土してなく、測量時に中世の土器片を採集していることから葺石かどうか判断できない。



第17図 坊ノ原古墳第4トレンチ実測図



第18図 坊ノ原古墳第5トレンチ実測図

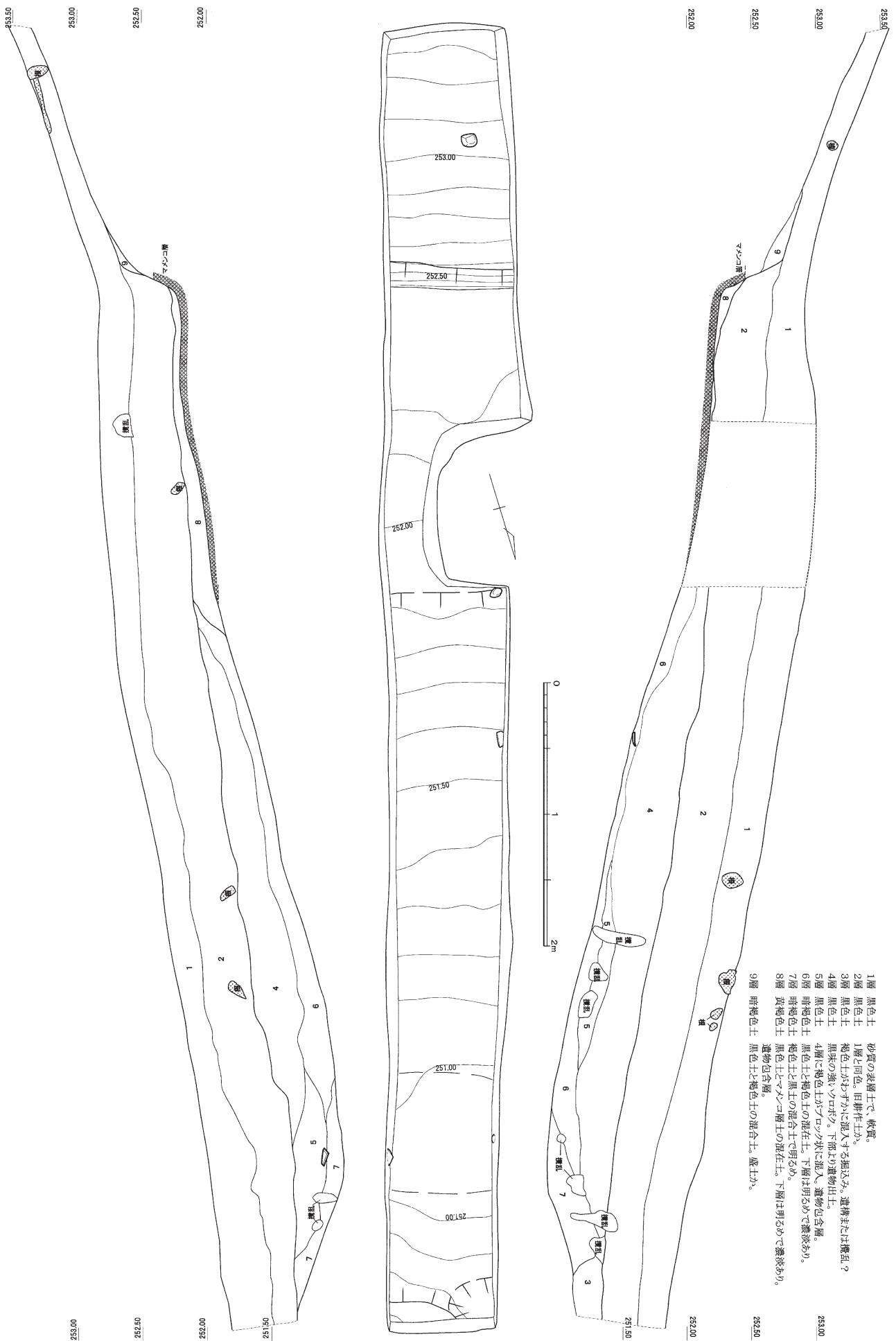


第19図 坊ノ原古墳第6トレンチ実測図

第7トレンチ くびれ部北側の墳端検出を目的に長さ 9.8m、樹木を避けるようにして概ね1mで設定した。第2トレンチと同じく北側へ傾斜する山林内で、地形上の観察では本来の墳形を残していると見られている。

墳丘側は表土の下に盛土層を検出したが、葺石と思われるような礫はほとんど検出していない。墳端付近は削平を受けた痕跡があるが、その墳端より外側は表土から厚さ 70cm の攪乱土層があり、約 2.3m で溝状の掘り込みを検出した。溝はマメンコ層およびその下層のローム層を掘り込んであり、溝幅は 5.2m で、断面逆台形状で覆土は黒色土(4層)の堆積があり、溝底の標高は 250.93m である。第2トレンチと同様に、自然地形にほぼ沿って緩やかに傾斜して外側でわずかに立ち上がって自然地形へと続いている。墳端の遺構はなく、葺石も転落している様子も見られない。

遺物は4層の黒色土層下部より高坏や甕と思われる土師器片を検出した。



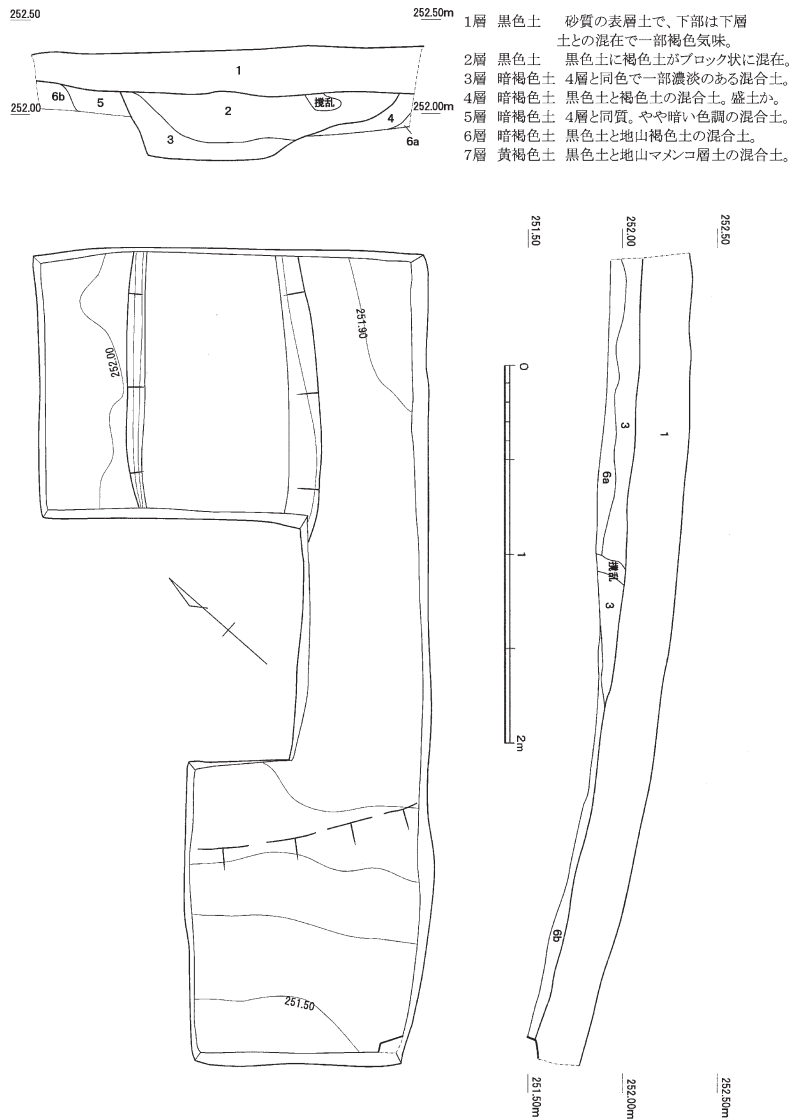
第20図 坊ノ原古墳第7トレンチ実測図

第8トレンチ 前方部南側隅角の墳端検出を目的に長さ 4.3m、樹木を避ける形で幅 0.8m～2mで設定した。北側へ傾斜する山林内で、地形の変動は見られないため、墳形の形状を残していると見られている。

溝状の遺構を検出し、位置的にも第5トレンチの溝と同一遺構と考えられる。幅は約1mで検出したが、土層観察では 1.5m程とみられる。墳丘側は約 27° の傾斜で、外側は 67° のやや急傾斜である。溝底の標高は 251.76mである。

なお、溝は第5トレンチへ続く北東方向に直線状に続いていると思われるが、南西側は樹木による未掘部分の先では検出できていないため、途中で途切れるか別方向へ向きを変えているかは不明である。トレンチの南西側は傾斜面へ続き、自然流失の可能性も考えられ、南側の隅角の確認はできなかった。

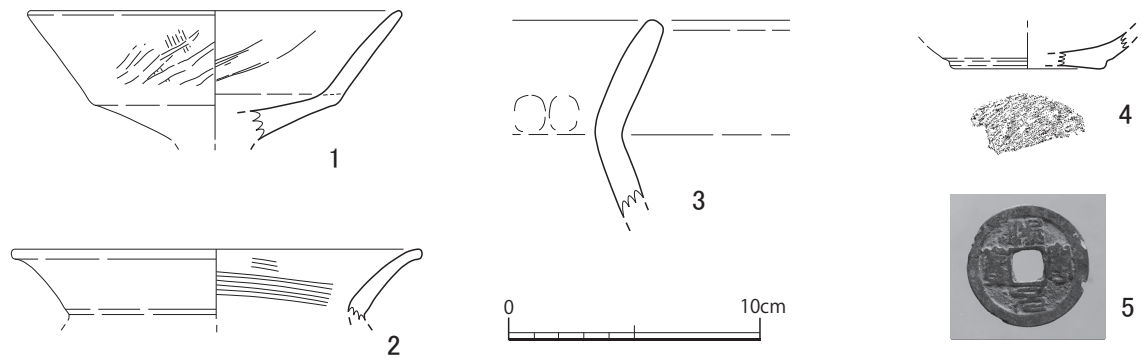
葺石等も検出できず、遺物は第22図3の土器が表土から出土したのみである。



第21図 坊ノ原古墳第8トレンチ実測図

出土遺物 古墳築造に関わると思われる遺物は、第4・7トレンチのくびれ部周溝内より出土している。第22図1は高坏、2は甕の口縁で第7トレンチからの出土で、古墳時代前期後半と思われる。その他図示していないが、第4トレンチから土師器のほか須恵器甕と思われる破片や、第7トレンチからは土師器甕胴部片等もある。

古墳以外の時代の出土遺物として3は弥生時代の粗製甕の口縁部、4は中世の土師器皿で底部には回転糸切の痕跡がある。3は第8トレンチ、4は第4トレンチの溝上層付近より出土している。5は北宋銭の熙寧元寶(篆書体)で、初鑄年は1068年で、第2トレンチの攪乱土層中より出土している。



第22図 坊ノ原古墳出土遺物実測図(1～4は1/3 5は2/3)

3 まとめ

墳丘周囲のすべてのトレンチで確認された周溝とみられる遺構については、すべて地山を掘込まれており、墳丘北側の傾斜地形上でも確認できたことから、墳丘の全周に巡らせている可能性がある。溝底部の標高は、後円部南東側の主軸付近はやや高めでそれ以外はほぼ水平状であるが、墳丘南側がやや低く掘り込まれている。幅については立地地形等の関係のためか、主軸より南側の第3・4トレンチより北側の第2・7トレンチの方が幅広く造られており、しかも後円部側よりくびれ部側が広いことからややいびつな馬蹄形を呈するものと思われる。前方部側前端側の第5・第8トレンチで検出された溝遺構については、隅角付近を検出できず様相も異なることから周溝との関連は判断できないが、周溝とすれば、地形的な制約あるいは陸橋の可能性も考えられることから、次年度の2次調査の課題としたい。

なお、葺石については全く確認できず、基底石による墳端を示す状況での検出はできなかった。墳丘測量時には多くの礫の存在が確認されており、葺石に覆われた墳丘の検出を予想していたが、実際は葺石の存在が疑問視される状態である。墳端と周溝の間に一定の距離があり、テラスの存在が想定されるが、基底石や敷石はもちろん転落礫も検出できないため、テラスかどうかの判断も困難である。唯一第6トレンチで礫の集中を検出したが良好な状態ではなく、墳丘上で中世の遺物が散見できることから、後世の開発による攪乱や抜取などの可能性もあり、この点も2次調査の課題である。

出土遺物について、土師器片のみの出土で埴輪らしき破片はなかったが、前期後半頃の時期が推定できる。

今回の1次調査では墳丘規模や形態の把握においてまだ不明確な点が多く、次年度も2次調査として継続して実施しており、その内容については後日報告したい。

参考文献

- (1) 清水宗昭「坊ノ原古墳」『大野原台地の遺跡 大分県大野原地区土地改良事業関係遺跡群予備調査概要Ⅱ』1977年
大野町教育委員会
- (2) 賀川光夫「坊ノ原古墳と御塚古墳」『大分県史大野町史』1980年 大分県大野町史刊行会
- (3) 『橋爪文夫文集 大野町の歴史と文化財』大野町文化財委員会
- (4) 玉川剛司「坊ノ原古墳墳丘測量調査について」『豊後大野市内遺跡発掘調査概要報告書6』2016年
- (5) 井大樹「坊ノ原古墳の石棺材」『豊後大野市内遺跡発掘調査概要報告書6』2016年



坊ノ原古墳遠景



墳丘（後円部）



墳丘（前方部）



調査風景（1T・6T）



調査風景（1T）



調査風景（2T）





調査風景 (3T)



調査風景 (4T)



調査風景 (5T)



調査風景 (6T)



調査風景 (7T)



調査風景 (8T)

IV 百枝遺跡（E地区）

1 調査の経過

立地地形は大野川河岸段丘上の標高約 102mの平坦地で、市立百枝小学校敷地内に所在する。過去に学校施設等の建設に伴ってA～D地区の4回にわたって調査が行われ、特にA～C地区より検出された旧石器時代の包含層は県下でも代表的な遺跡として知られている。今回の調査はプール施設改築に伴うもので、プール施設の大部分は既にA地区として調査が行われているため、今回は3m×10m程の増築範囲をE地区として行った。

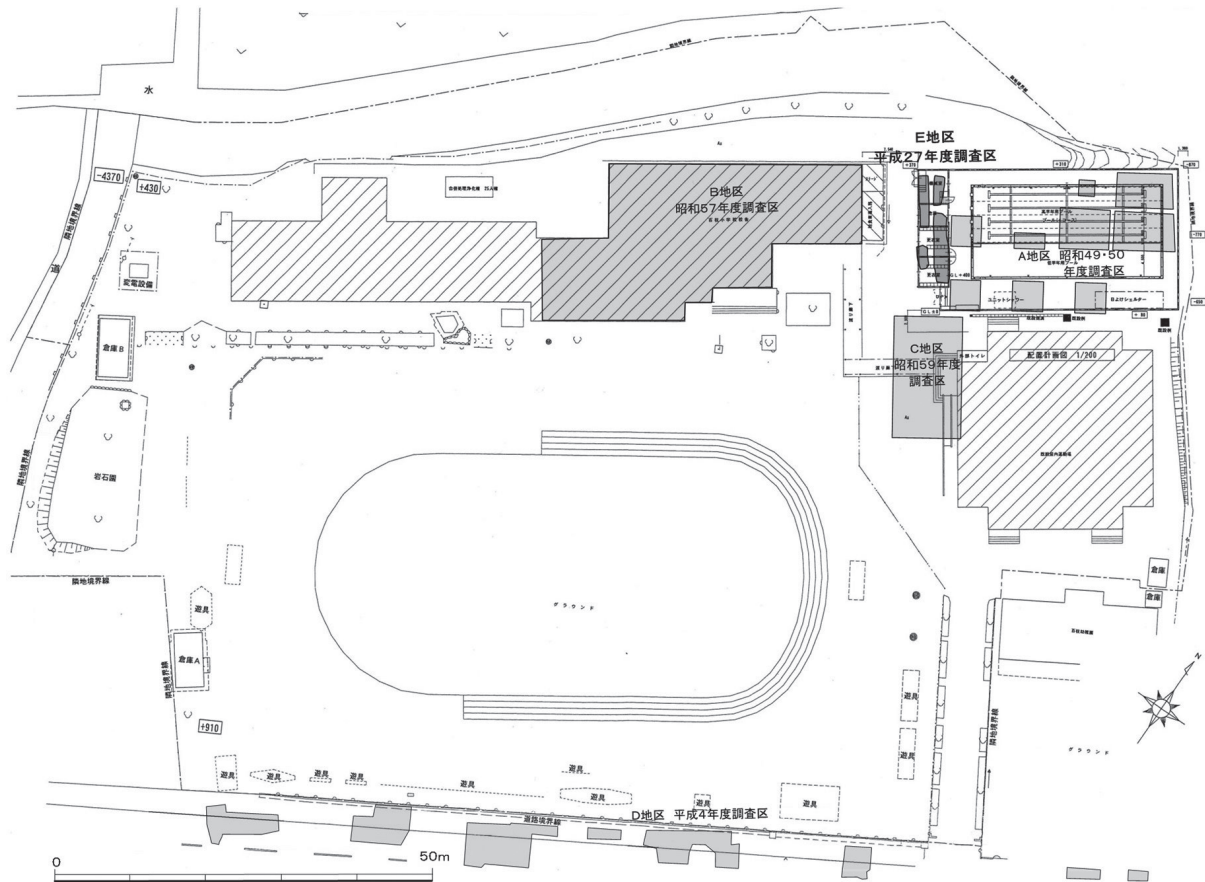
位置的にもA～C地区に隣接するため旧石器時代の包含層の存在が予想されることから、重機による表土剥ぎを行った。しかし、調査区内の中央部分は水道や汚水などの配管が複数埋設されており、あるいは瓦礫やコンクリート片などが埋められるなど、著しく攪乱を受けていることが判明した。調査トレンチを4箇所に分けて攪乱を避けて掘り下げることで、計 21 m²を調査した。

ローム層より旧石器時代の包含層を検出し、トレンチ4箇所計 141 点の出土遺物を検出した。そのうち剥片を含めた石器等は27点で、スクレーパー1点、石核1点以外はすべて剥片・細片である。遺物の多くが礫・礫片であるが、第3トレンチ南寄りで集中箇所があり、集石遺構と考えられる。礫石器と思われる台石・敲石も3点確認している。

また、C地区と同様に中世の柱穴群と思われる遺構もみられたが、これらに伴う遺物は出土していない。



第23図 百枝遺跡周辺地形図



第24図 百枝遺跡調査区位置図

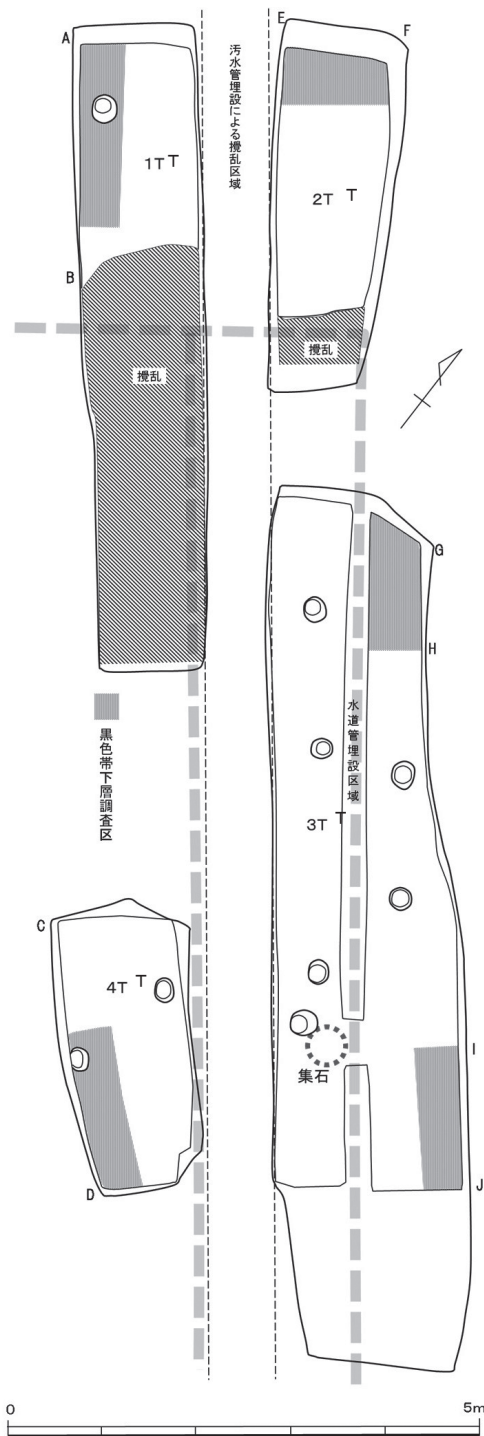
2 調査の概要

遺物包含層 今回の調査区は平坦地形であるが、地積層は段丘上の縁辺に近いので、北側にやや傾斜が見られる。層序(第26図)について、南側のC地区では検出されていないI層の黒色土層とII層のアカホヤ層が検出できた点を除けばC地区とほぼ同じ層序で堆積している。遺物はV層のローム層よりVII層下部までの間で出土しており、VII層にAT(始良 Tn 火山灰土)層と思われる黄白色の粒子が層中にブロック状に包含するが、これを境に遺物の出土数は減少する。各トレンチで部分的にXI層の黒色帯下部まで掘り下げを行ったが、全く出土遺物はみられない。そのためE地区の出土遺物はAT層直上のローム層が主要な包含層であると考えられる。

集石遺構 調査区全体で礫は検出されているが、特に第3トレンチ南寄りに多く偏り、25点程が集中して検出している。集石遺構の層位はAT層直上のVII層の上部で、第2文化層でもやや下層の位置である。多くは拳大・掌大の大きさの河原石で、長軸を垂直に立てたような配置がいくつか見られる。石材は凝灰角礫岩や砂岩など大野川で見られるものとはほぼ一致する。礫の多くには被熱によると推定される煤の付着や赤化がみられ、剥離や破損も多い。41点(13個体分)の礫で接合が確認でき、特に集中する部分を中心に半径1m程の範囲に分布している。また、研磨や敲打痕など使用痕のある礫は礫石器(台石・敲石)と考えられる。

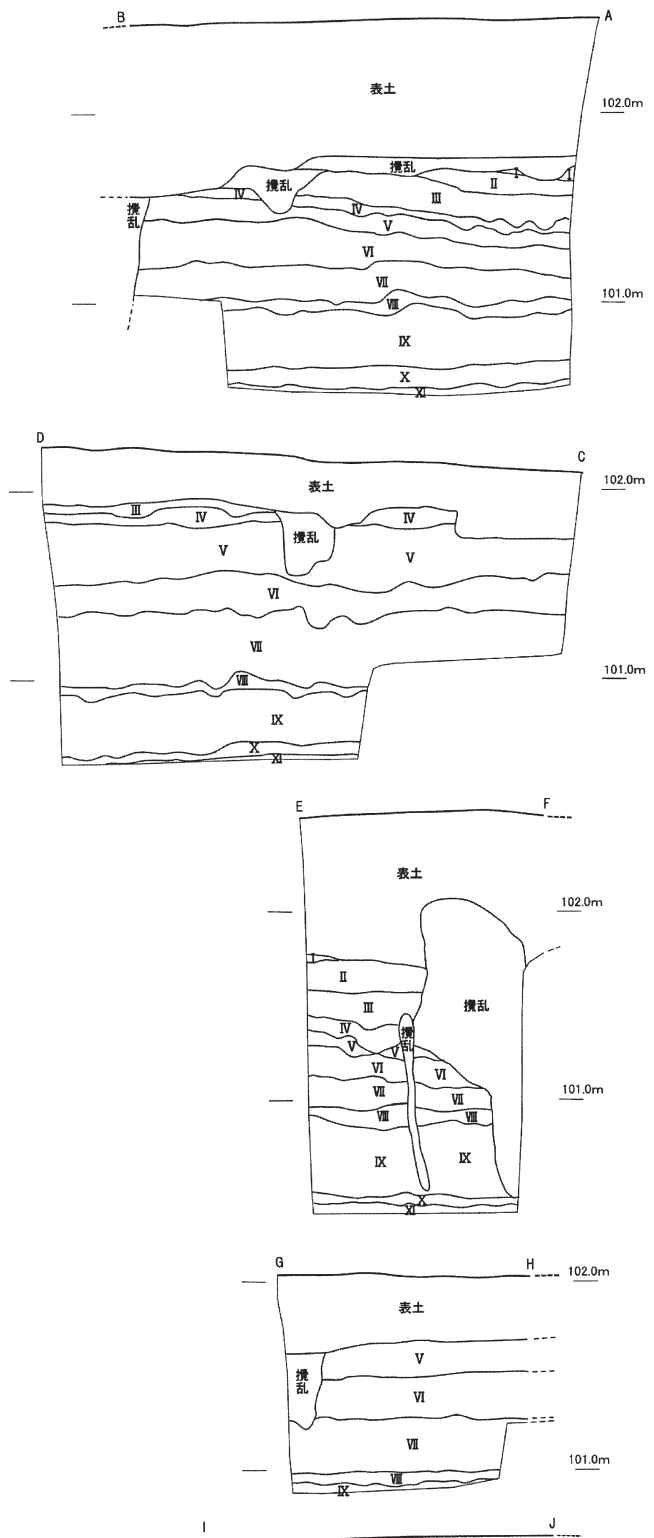
遺物 トレンチ4箇所計141点の遺物を検出したが、大半を占めるのが礫・礫片で、剥片を含めた石器等はわずか27点程である。石材は頁岩・ホルンフェルスのほかチャートなどが見られる。今のところ剥片以外では、スクレーパー1点、石核1点を確認している。層位は集石遺構と同じVI～VII層にかけて多くみられる。

第29図1は頁岩製のスクレーパーで、大型剥片の両側辺に調整剥離があり刃部としている。2は頁岩またはホルンフェルス製の立方体状の石核で、剥片2点(3・4)と接合する。5・6は頁岩またはホルンフェルス製の縦長剥片である。7～9は使用痕のある礫で礫石器と思われるもので、9は集石の一部である。7・8は研磨痕があり台石と思われる。9は端部に打痕があることから敲石と思われる。

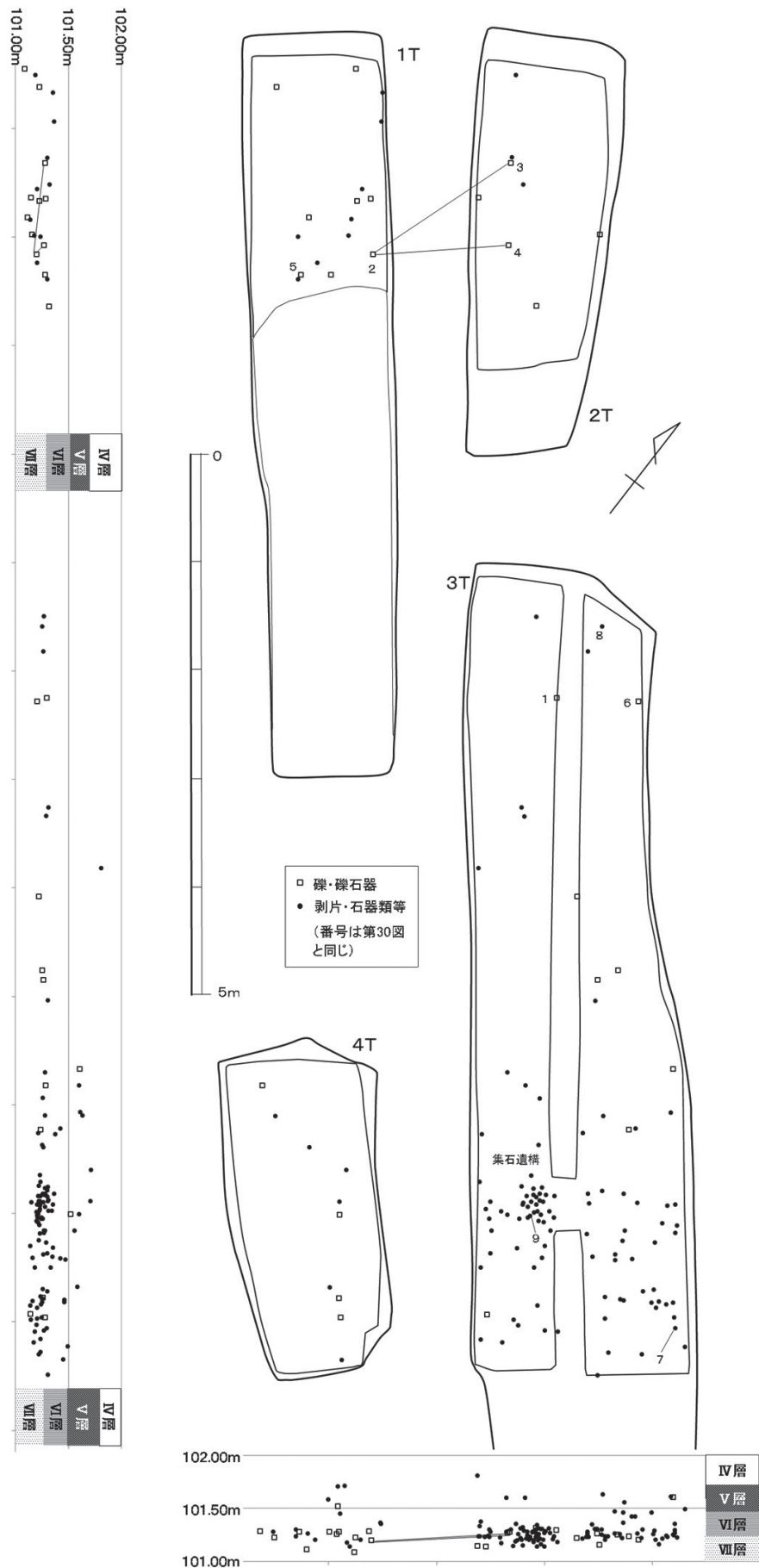


第25図 百枝遺跡E地区調査区配置(1/80)

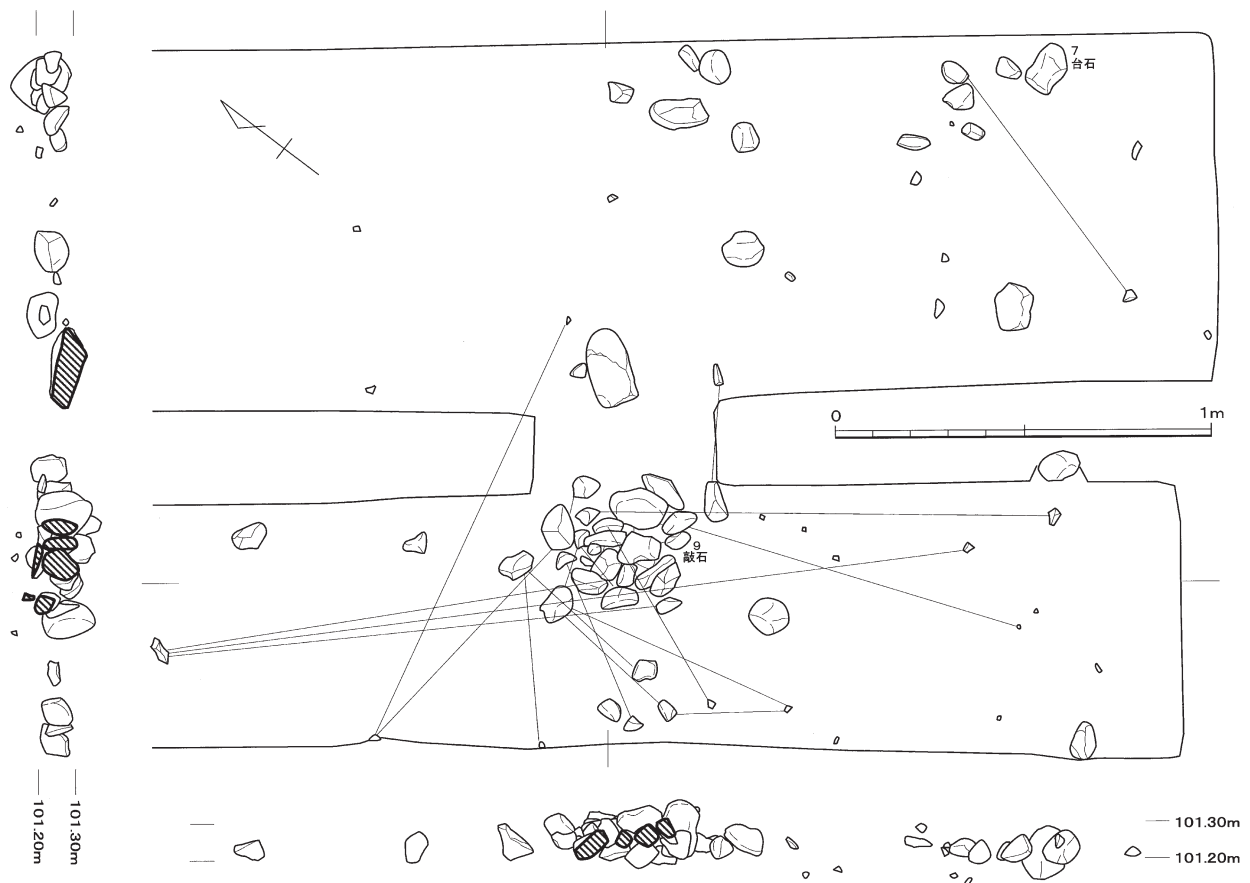
- I層 黒色土 砂質のクロボク
- II層 暗褐色土 アカホヤ層?
- III層 黒色土 クロボク
- IV層 暗褐色土 III層とV層の漸移層
- V層 黄褐色土 ローム層、VI層よりやや暗い
- VI層 黄褐色土 明るいローム層、軟質で下部に白色粒子を含む
- VII層 暗黄色土 やや暗く硬質のローム層、部分的に黄白色粒子含む(AT層)
- VIII層 暗黄色土 暗く硬質のローム層、VII層とIX層の漸移層
- IX層 黒褐色土 黒色帯、硬質
- X層 黒褐色土 IX層とXI層の漸移層
- XI層 黄色土 粘質の強いローム層



第26図 百枝遺跡E地区土層図(1/40)



第27図 百枝遺跡E地区出土遺物分布図



第28図 百枝遺跡E地区集石遺構実測図

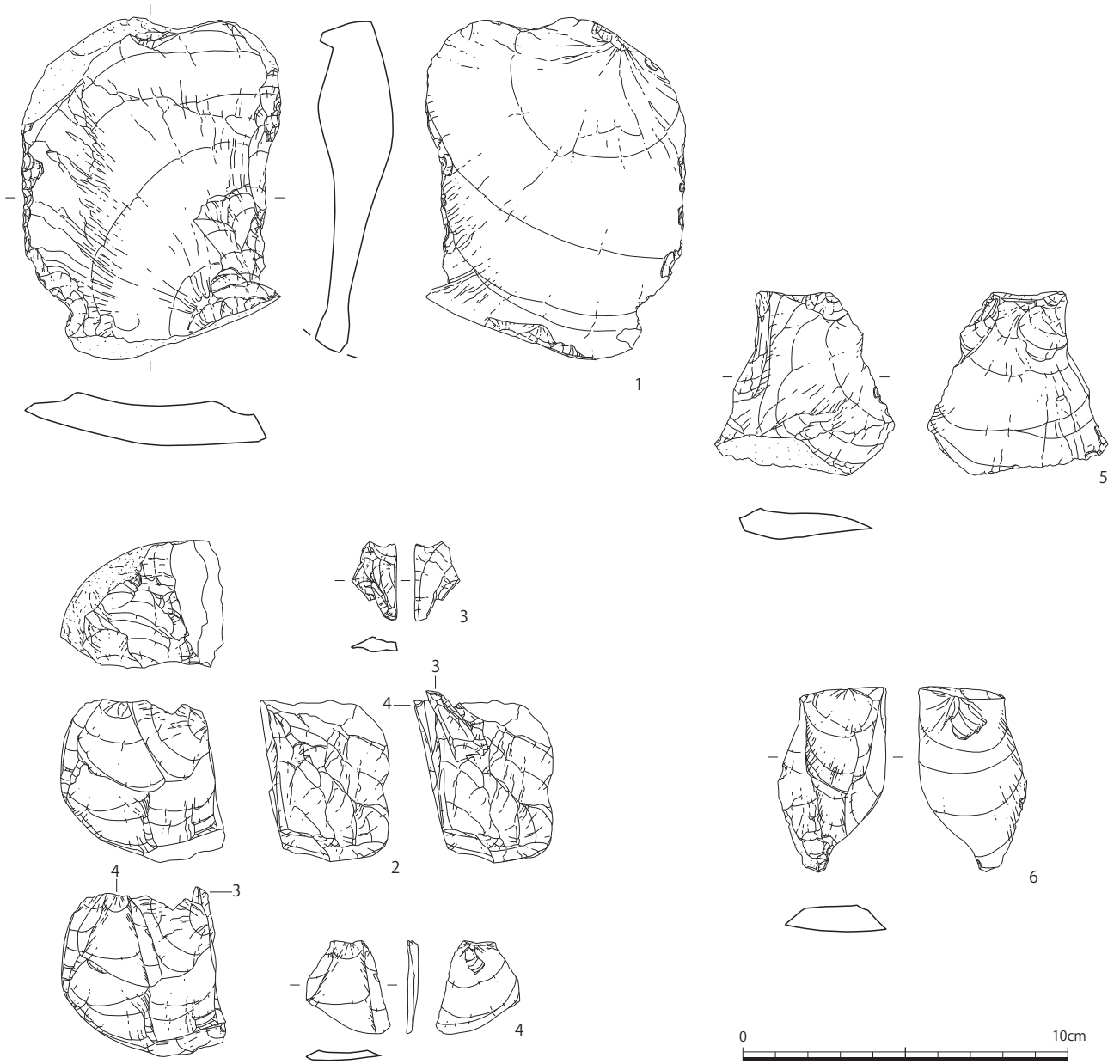
3 まとめ

今回の調査区では面積も限られ、遺物も点数は少なかったが、隣接するA～C地区とはほぼ共通した内容であった。百枝遺跡ではこれまで旧石器時代の集石遺構が計9基検出されているが、クロボクとの漸移層のIV層から黒色帯のIX層まで大きく3つの文化層を主体とする各層位から検出されて、期間の長い生活の痕跡を残す遺跡として知られている。今回のE地区の集石遺構については、層位からC地区第1集石遺構とほぼ同じ第2文化層と推定されるもので、いずれも被熱痕を有する礫が多く、接合関係が認められるなど共通点も多い。

遺物は、V層からVII層のローム層中が主要な包含層で、A地区で検出された第1文化層であるIV層からはほとんど出土していない。また、VII層のAT下層より遺物は減少し、B・C地区で確認できた黒色帯以下の第3文化層に相当する遺物も出土していないため、集石遺構と同じく第2文化層を主体とする調査区であるといえる。

参考文献

- (1) 清水宗昭「百枝小学校遺跡」『大分県史先史編Ⅰ』昭和58年 大分県
- (2) 清水宗昭・栗田勝弘編『百枝遺跡C地区』1985年 三重町教育委員会
- (3) 橘昌信『日本の古代遺跡49 大分』平成7年 保育社
- (4) 栗田勝弘「旧石器時代」『三重町誌総集編』昭和62年 三重町



第29图 百枝遺跡E地区出土遺物実測図



調査区全景



調査区全景



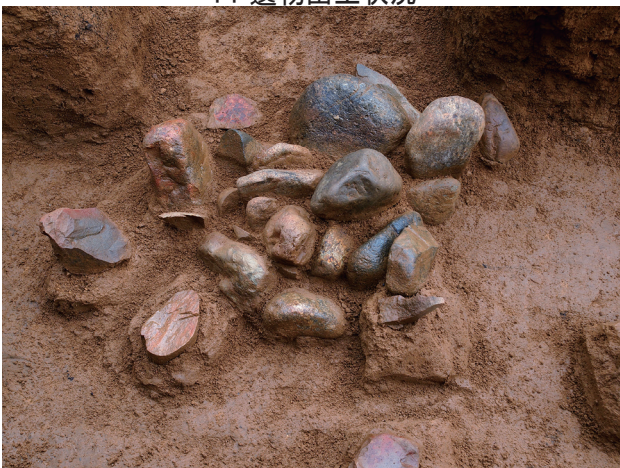
1T 土層



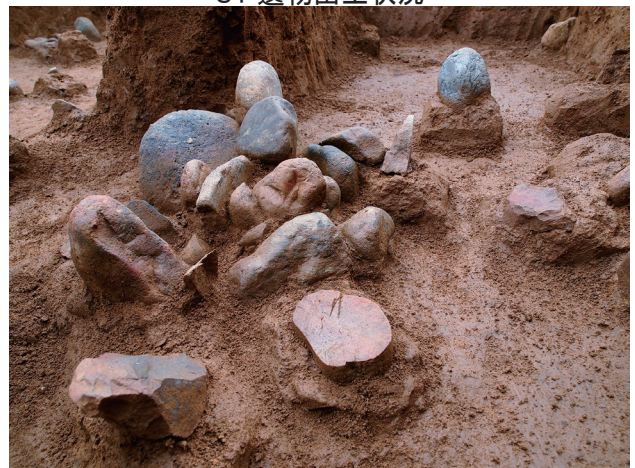
1T 遺物出土状況



3T 遺物出土状況



3T 集石遺構



V 若宮古墳

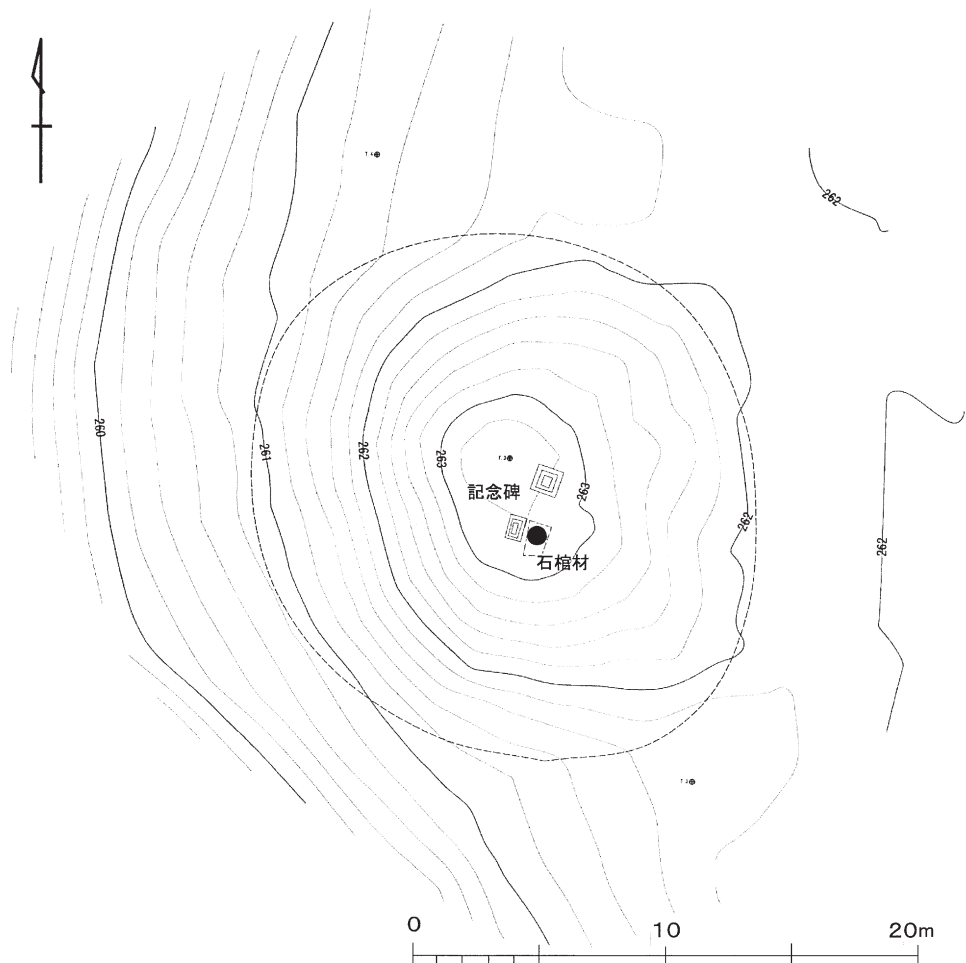
朝地町宮生若宮神社境内の山林内に所在する。立地環境は標高 262mの東西に長く伸びる尾根地形から続く台地上で、見通しは良好ではないが平井川流域の平野を見下ろす位置でもある。なお、西方の同じ尾根地形の上尾塚地区に丸山古墳・早尾原古墳・高伏古墳など多くの古墳群が点在している。

墳丘は台地縁辺の傾斜地に立地しているためか東西径 19m、南北径 20mで、やや楕円気味の円墳である。高さは東側で約 1.2m、西側で 2.4mを測る。墳頂部には記念碑が2基建立されていて、うち1基の脇に石棺材が置かれている。墳頂の平坦面は径4m程で、盗掘跡の痕跡はないが、石棺の露出・石碑の建立により墳丘頂部を削平等により改変されているとみられる。墳丘上では大型の礫がわずかに見られるが、段築や造出し等は確認できない。周溝も不明であるが、周囲の地形から西側の台地に接する部分に設けられている可能性がある。

出土遺物も特に伝えられてなく、測量中若干の土器片を採集しているのみである。



第30図 若宮古墳周辺地形図



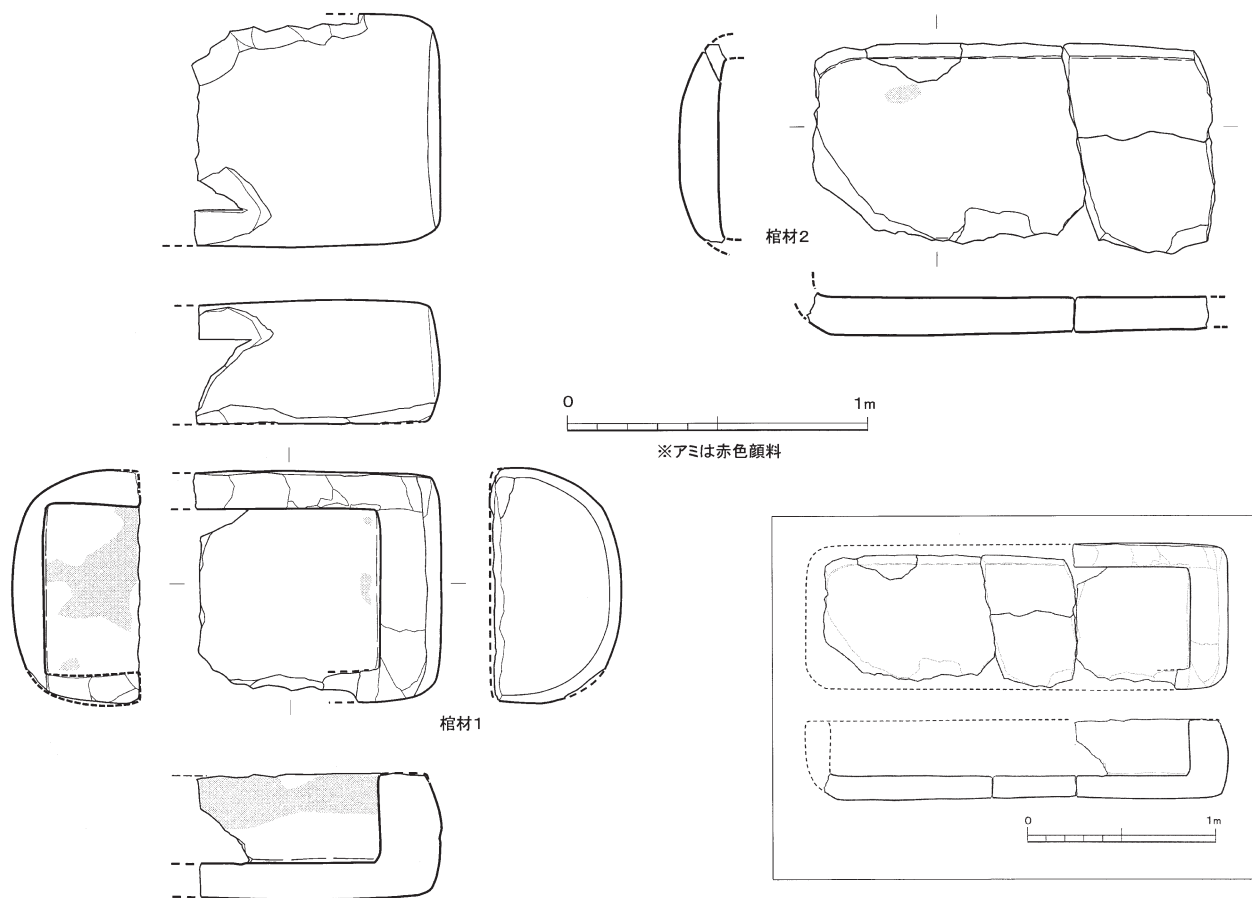
第31図 若宮古墳墳丘測量図

墳頂部に置かれている石棺について、出土に関する経緯等は伝わっていないが、墳頂中心近くの記念碑が文政 11(1828)年に景行天皇の土蜘蛛討伐伝説に因んで建立されており、この頃掘り出された可能性がある。著しく破損しているが凝灰岩製の刳抜式で、内面の深さから棺身と思われる。第 32 図の棺材1は片側小口部、棺材2は底部の破片で、他に側縁部とみられる破片がいくつか確認できるが、完形に復元できるほど遺されてなく、蓋石らしき破片もみられない。棺材1は幅 78cm、残存長 81cm で、断面形は半円形状である。表面は風化が著しいが縄掛突起の痕跡は確認できない。内面には丁寧な調整が施されており、赤色顔料が一部に残っている。断面は方形状に深く刳抜かれており、角部分の厚さは5cm 程と薄くなっている。石枕や底部穿孔は確認できない。

棺材1・2は接合し、さらに棺材2には小口部へ続く屈曲部のわずかな痕跡が観察できることから、その復元図(第 32 図右)から推定して、全長は 220cm 程と推定される。縄掛突起や石枕はなく、平面は長方形で断面は半円形に近い形態は、近隣の類似例として竹田市の石舟古墳石棺の棺身があり、形式編年の I 形式(4世紀末～5世紀前半)の特徴と考えられる。しかし、長幅比が2.8とやや幅広く、断面が方形状に深く刳抜かれていたという新しい時期の要素も見られることから、やや後出する5世紀前半～中頃と推定される。

参考文献

神田高士「大分の舟形石棺」『おおいた考古 第3集』1990年 大分県考古学会



第32図 若宮古墳石棺実測図(1/25)

復元想定図 (1/40)

若宮古墳写真図版



若宮古墳遠景



若宮古墳墳丘近景



若宮古墳墳頂部



若宮古墳石棺



若宮古墳石棺（棺材1）



若宮古墳石棺（棺材1）



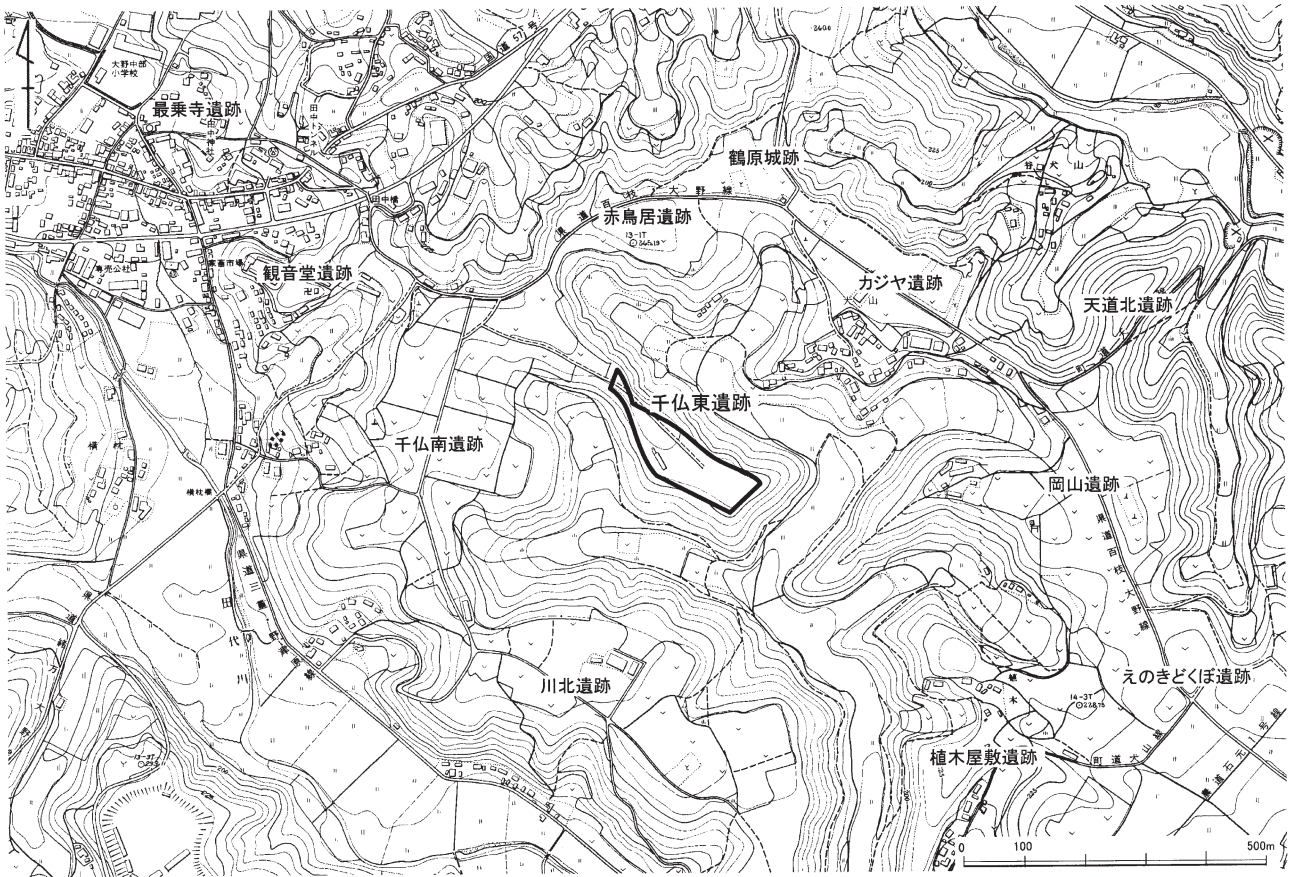
若宮古墳石棺（棺材2）

VI 千仏東遺跡

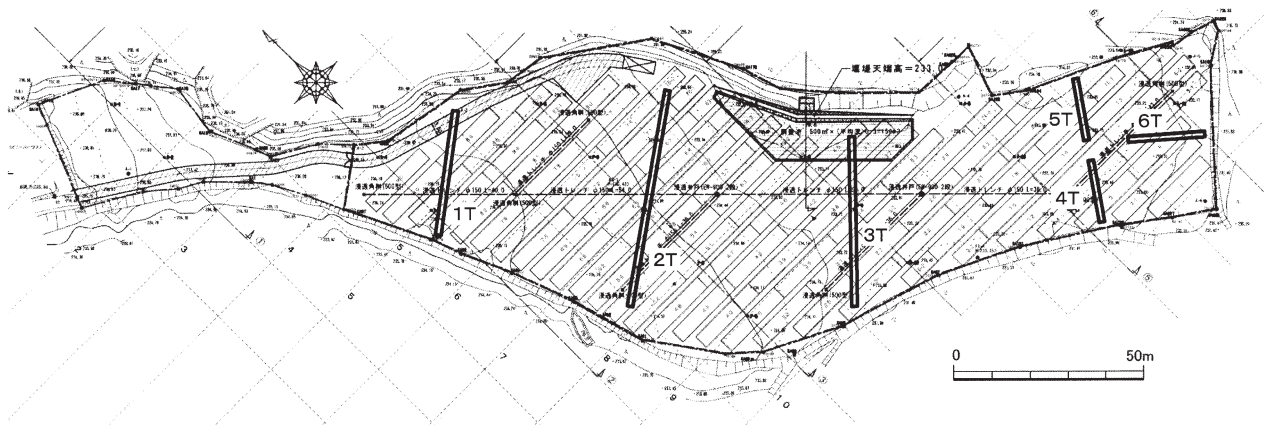
調査の概要

千仏東遺跡は大野町中心付近の広大な台地より尾根状に続く狭い台地地形上で、現状は旧大野高校の農場跡の原野となっている。太陽光発電施設建設に伴い、開発予定範囲内にてトレンチを計6か所を設定し、幅2m、長さ延べ170mを重機による表土剥ぎを行った。

ほぼすべてのトレンチで表土直下の20cm程の深さでローム層を検出したが、一部にはマメンコや黒色帯が現れている。クロボク層が全く残ってなく、過去に台地全体の造成が行われ、遺物が包含する層は大幅に掘削されていることが判明した。唯一4トレンチの西端でクロボク層を検出し、溝らしい跡を検出したが遺物はなく、近年の攪乱の可能性もある。それ以外削平が著しい状態で遺構・遺物は全く確認できないため、工事着工に問題なしと判断した。



第33図 千仏東遺跡周辺地形図



第34図 千仏東遺跡調査区配置図

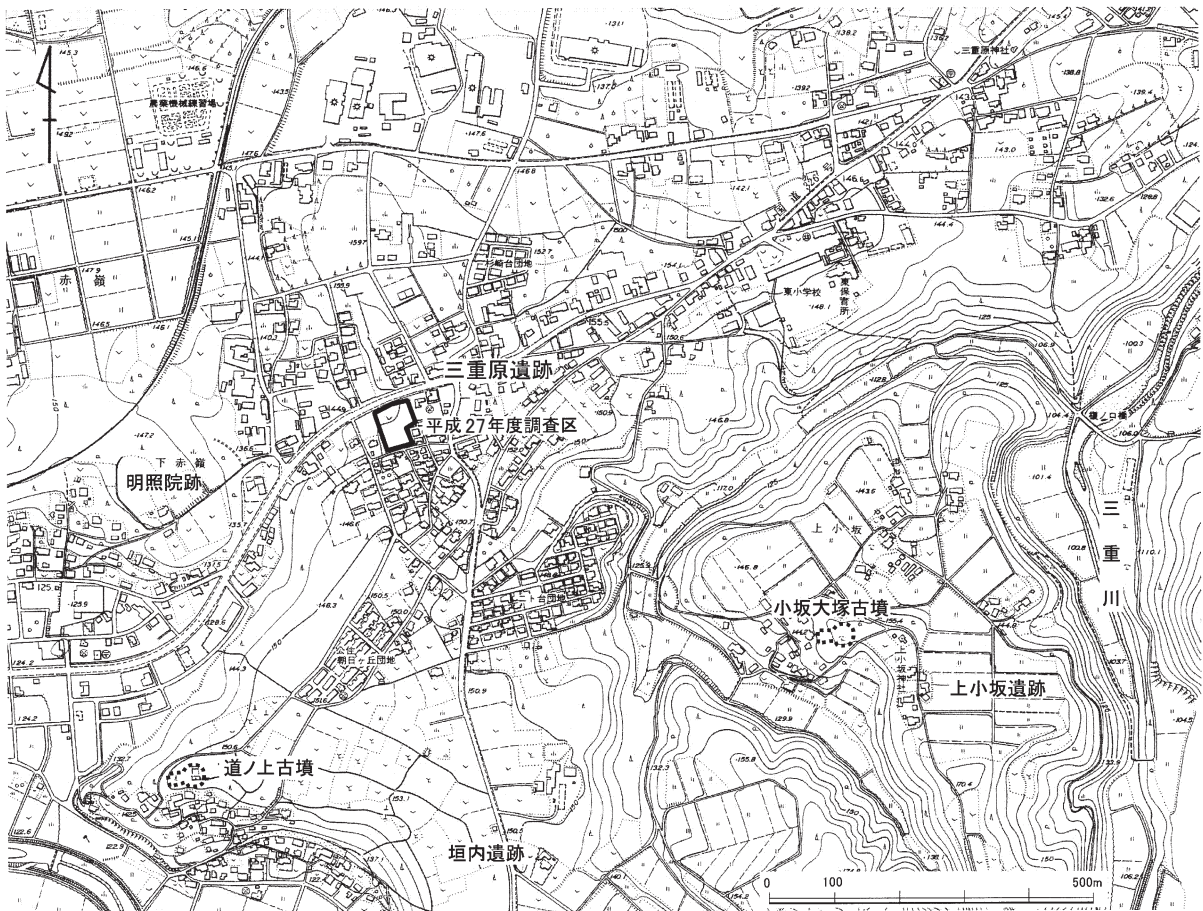


千仏東遺跡調査写真

Ⅶ 三重原遺跡

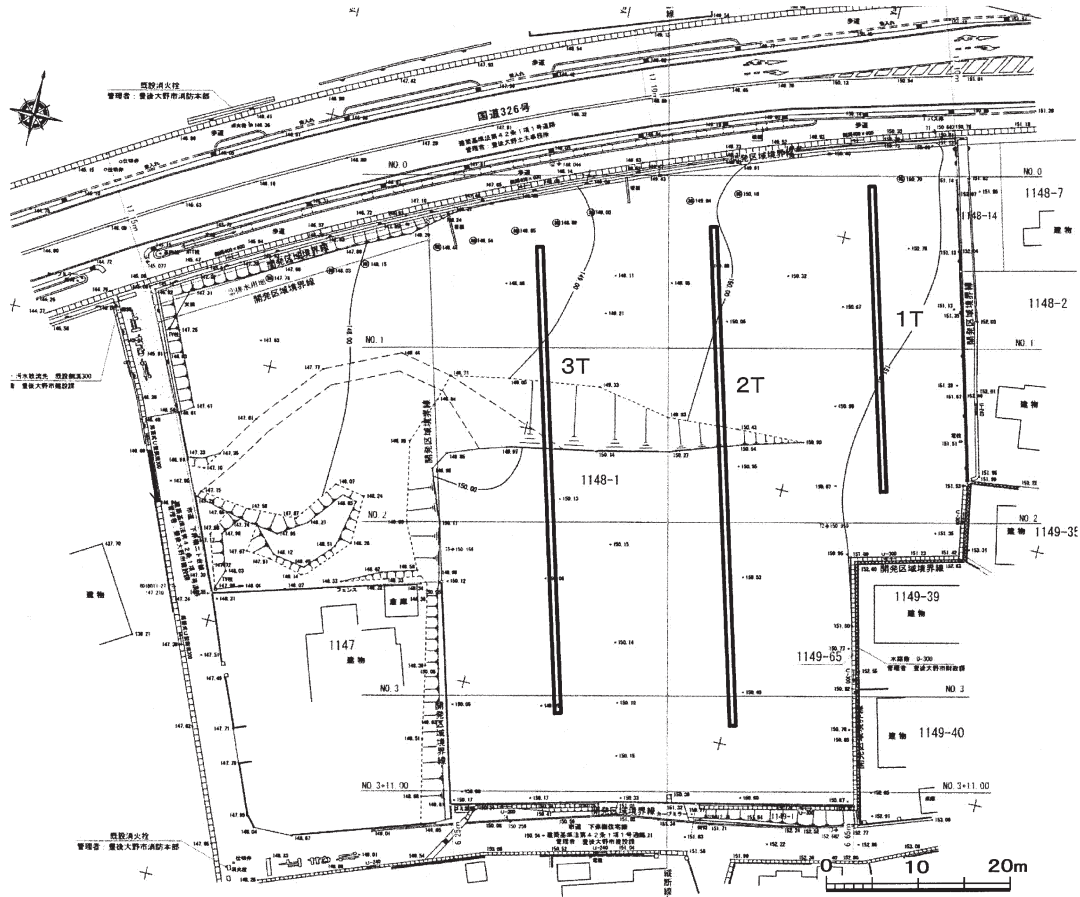
調査の概要

三重原遺跡は三重町東部に広がる広大な台地上で、過去に数度にわたって試掘確認調査が行われているが、これまで本調査に至ったことはない。27年度の調査区は台地端のわずかに起伏のある傾斜地形で、宅地に囲まれた原野となっている。周辺に道ノ上古墳などがあり、遺跡の存在が予想されるため、宿泊施設建設予定範囲内にトレンチを計3か所設定し、幅1m、長さ延べ144mを重機による表土剥ぎを行った。



第 35 図 三重原遺跡周辺地形図

ほぼすべてのトレンチで表土より30~40 cm程の深さでローム層を検出したが、抜根跡らしい攪乱が多く見られた。調査区南側は表土直下でローム層が現れ、かなり削平された状況であった。遺構や遺物は全くみられないため、工事に問題ないと判断した。



第36図 三重原遺跡調査区配置図



三重原遺跡調査写真

報 告 書 抄 録

フリガナ	ブンゴオオノシナイイセキハツツチヨウサガイヨウホウコクシヨ								
書名	豊後大野市内遺跡発掘調査概要報告書7								
副書名	平成27年度調査								
シリーズ名									
シリーズ番号									
編著者名	田中裕介 井大樹 大矢健太郎 中原彰久 村田仁志 諸岡 郁								
編集機関	豊後大野市教育委員会								
所在地	〒879-7131 大分県豊後大野市三重町市場1200番地								
発行年月日	平成29年3月17日								
フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
		市町村	遺跡番号						
ウルシオ 漆生古墳群	ブンゴオオノシ 豊後大野市 越生字大久保・城山	オガタマチ 緒方町	44212	212203	32°58'33"	131°29'27"	2015.12.19 ～2015.12.28	46m ²	確認調査
ボウノハル 坊ノ原古墳	ブンゴオオノシ 豊後大野市 桑原字羽部	オオノマチ 大野町	44212	212412	33°01'49"	131°28'27"	2015.10.21 ～2015.12.17	63m ²	確認調査
モモエダ 百枝遺跡 (E地区)	ブンゴオオノシ 豊後大野市 西泉字折立	ミエマチ 三重町	44212	212036	33°00'07"	131°34'41"	2015.8.27 ～2015.9.18	21m ²	確認調査
ワカミヤ 若宮古墳	ブンゴオオノシ 豊後大野市 宮生字若宮	アサジマチ 朝地町	44212	212372	32°59'50"	131°27'32"	2015.6.30 ～2015.7.30		測量調査
センボトケガン 千仏東遺跡	ブンゴオオノシ 豊後大野市 田代字尾無	オオノマチ 大野町	44212	212514	33°02'10"	131°30'40"	2015.5.26 ～2015.5.28	340m ²	確認調査
ミエノハル 三重原遺跡	ブンゴオオノシ 豊後大野市 赤嶺字大原	ミエマチ 三重町	44212	212045	32°59'16"	131°36'12"	2015.7.9 ～2015.7.10	144m ²	確認調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
漆生古墳群	墳墓	古墳	墓坑跡・石棺				前方後円墳ほか		
坊ノ原古墳	墳墓	古墳	周溝		土師器		前方後円墳		
百枝遺跡 (E地区)	散布地	旧石器	集石		旧石器・礫				
若宮古墳	墳墓	古墳	石棺				円墳		
千仏東遺跡	散布地								
三重原遺跡	散布地								

豊後大野市内遺跡発掘調査概要報告書7

平成27年度調査

発行日 2017年3月17日発行

編集・発行 豊後大野市教育委員会

〒879-7131豊後大野市三重町市場1200